

玉沢地区条里跡

ガランジ地区

茨川原近世墓地

田仲地地区

一般国道442号(木の上工区)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第105輯

2000

大分県教育委員会



玉沢地区条里跡 ガランジ地区 茨川原近世墓地 田仲地地区遠景 (南から)

序

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて、平成9年7月から11月まで、及び平成10年10月から11月までの期間に実施した一般国道442号（木の上工区）道路改良工事に伴う玉沢地区条里跡ガランジ地区・茨川原近世墓地・田仲地地区の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

遺跡の所在する大分市の七瀬川流域は、市内に残された数少ない自然豊かな地域であり、歴史的にみても条里跡や中世の集落景観を顕著に残しています。このほか集落の辻々には中近世の石造品も数多く残されており、往時の面影を漂わせています。

調査の結果、遺跡からは弥生～古墳時代及び近世の遺構・遺物が発見されましたが、この成果は当地域の歴史を解明するうえで重要なものであります。

今後、本書が文化財の啓発・保護並びに学術研究等に役立てば幸いに存じます。

最後にこの発掘調査に多大なる御協力を頂いた関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成12年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は平成9年7月から11月と平成10年10月から11月にかけて実施した、一般国道442号（木の上工区）道路改良工事に伴う玉沢地区条里跡ガランジ地区・茨川原近世墓地・田仲地地区の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 今回、調査の対象となったガランジ地区は、玉沢地区条里跡（遺跡台帳番号322111）として周知されている地域の南西端に位置する。従前はガランジ遺跡として取り扱ってきたが、遺跡台帳番号の運用上の都合から、今後はガランジ地区として取り扱うこととする。
4. 遺物の整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室整理補佐員がおこない、遺物の実測トレースは同文化課職員及び整理補佐員があたった。
5. 出土遺物及び関係資料は、同文化課資料室で保管している。
6. 図版に使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。表示してある座標値はキロメートル単位である。
7. 本書中「第Ⅳ章 茨川原近世墓地」の編集・執筆は同文化課 主査 田中裕介、その他は同文化課 主任 染矢和徳が編集・執筆を行なった。

本文目次

第Ⅰ章 調査概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過	2
第Ⅱ章 地理的歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 ガランジ地区	11
第1節 調査概要	13
第2節 遺構と遺物	15
第3節 小結	22
第Ⅳ章 茨川原近世墓地	25
第1節 調査概要	27
第2節 立地と環境	27
第3節 墓地の旧状と現状	28
第4節 調査の方法	28
第5節 石製墓碑の記録	31
1) 撤去された墓石	31
2) 残存墓石	34
第6節 発掘調査の記録	37
1) 上面（第1遺構面）検出遺構	37
2) 包含層	40
3) 下面（第2遺構面）検出遺構	43
第7節 調査の成果と課題	52
1) 墓石から	52

2)	墓坑と棺	53
3)	副葬品	54
第8節	まとめ	56
	写真図版	57
第V章	田仲地地区	59
第1節	調査概要	61
第2節	遺構と遺物	62
1)	田仲地地区基本層序と自然地形落ち込み	62
2)	竪穴住居跡	65
3)	土坑	73
4)	井戸状遺構	78
5)	溝状遺構	81
6)	ピット内出土遺物及び表面採集遺物	81
第3節	小結	82

第I・II 挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	1
第2図	大分川下流域沖積低地の地形分類図	3
第3図	調査遺跡周辺遺跡分布図	6
第4図	調査区周辺地形 (1)	7～8
第5図	調査区周辺地形 (2)	9～10

第III章 ガランジ地区 挿 図 目 次

第1図	玉沢地区条里跡ガランジ地区周辺地形図	13
第2図	ガランジ地区遺構配置図	14
第3図	1号溝実測図	15
第4図	1号溝出土遺物実測図 (1)	17
第5図	1号溝出土遺物実測図 (2)	19
第6図	1号溝出土遺物実測図 (3)	21
第7図	1号水口状遺構実測図	22
第8図	1号水口状遺構出土遺物実測図	22
第9図	ガランジ地区周辺字図	22

図 版 目 次

図版1	ガランジ地区遠景	ガランジ地区全景	ガランジ地区I区全景
図版2	ガランジ地区II区全景	ガランジ地区II区1号水口状遺構	
		1号溝出土遺物	
	1号溝出土遺物	1号溝出土遺物	
	1号溝出土遺物	1号溝出土遺物	

第Ⅳ章 茨川原近世墓地 挿 図 目 次

第1図	茨川原近世墓地と周辺の景観	27
第2図	茨川原近世墓地遺構配置図	29
第3図	包含層層序柱状図	30
第4図	茨川原近世墓地墓石配置図	31
第5図	墓石本体横断面寸法と墓石形式の相関	32
第6図	茨川原近世墓地の墓石	34
第7図	茨川原近世墓地上面墓坑配置図	37
第8図	1号墓・2号墓	37
第9図	12号墓	38
第10図	15号墓	39
第11図	16号墓	39
第12図	茨川原近世墓地包含層遺物出土状態	41
第13図	茨川原近世墓地包含層出土遺物	42
第14図	包含層残留遺物	43
第15図	茨川原近世墓地下面墓坑配置図	43
第16図	17号墓	44
第17図	18号墓	44
第18図	19号墓	45
第19図	20号墓	46
第20図	21号墓	46
第21図	21号墓出土銭貨	46
第22図	23号墓	47
第23図	26号墓	47
第24図	27号墓	48
第25図	28号墓	49
第26図	29号墓	49
第27図	30号墓	50
第28図	31号墓	50
第29図	32号墓	51
第30図	茨川原近世墓地墓坑法量相関表	54

表 目 次

第1表	茨川原近世墓地撤去墓石一覧表	32
第2表	茨川原近世墓地墓石一覧表	36
第3表	茨川原近世墓地墓坑一覧表	53
第4表	茨川原近世墓地出土土師質土器観察表	55

挿入写真目次

写真1	遠景（南から）	28
写真2	茨川原近世墓地全景（西から）	28

写真3	包含層掘り下げ中（北から）	30
写真4	調査風景	30
写真5	1号墓石	34
写真6	2号墓石	35
写真7	3号墓石	35
写真8	4号墓石	35
写真9	5号墓石	36
写真10	6号墓石	36
写真11	1号墓と6号墓石	38
写真12	12号墓	38
写真13	15号墓	39
写真14	16号墓	40
写真15	包含層南半出土状態（北から）	40
写真16	包含層北半出土状態（東から）	40
写真17	下面の墓坑（南から）	43
写真18	下面の墓坑（東から）	43
写真19	17号墓	44
写真20	18号墓	44
写真21	19号墓	45
写真22	20号墓	45
写真23	21号墓	46
写真24	23号墓	47
写真25	27号墓	48
写真26	28号墓	49
写真27	29号墓	49

図 版 目 次

図版1 茨川原近世墓地出土遺物

第V章 田仲地地区 挿 図 目 次

第1図	田仲地地区基本層序	61
第2図	自然地形落ち込み第Ⅵ～Ⅷ層出土遺物実測図	62
第3図	田仲地地区遺構配置図	63～64
第4図	1号～3号竪穴住居跡実測図	65
第5図	4号・5号竪穴住居跡実測図	66
第6図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）	67
第7図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）	68
第8図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図（3）	69
第9図	4号竪穴住居跡出土遺物実測図（4）	70
第10図	6号竪穴住居跡実測図	70
第11図	7号竪穴住居跡実測図	71
第12図	8号竪穴住居跡実測図	71

第13図	9号竪穴住居跡実測図	71
第14図	10号竪穴住居跡実測図	72
第15図	10号竪穴住居跡出土遺物実測図	72
第16図	1号土坑実測図	74
第17図	2号土坑実測図	74
第18図	3号土坑実測図	74
第19図	4号土坑実測図	74
第20図	5号・6号土坑実測図	74
第21図	5号土坑出土遺物実測図	74
第22図	6号土坑出土遺物実測図	74
第23図	7号土坑実測図	74
第24図	8号土坑実測図	75
第25図	9号土坑実測図	75
第26図	10号土坑実測図	76
第27図	10号土坑出土遺物実測図	76
第28図	11号・12号土坑実測図	77
第29図	13号土坑実測図	77
第30図	14号土坑実測図	77
第31図	15号土坑実測図	77
第32図	16号・17号土坑実測図	78
第33図	18号土坑実測図	78
第34図	1号井戸状遺構実測図	79
第35図	1号井戸状遺構出土遺物実測図(1)	79
第36図	1号井戸状遺構出土遺物実測図(2)	80
第37図	1号溝状遺構実測図	81
第38図	1号溝状遺構出土遺物実測図	81
第39図	ピット内出土遺物及び表面採集遺物実測図	82

図 版 目 次

図版1	田仲地地区全景		
図版2	田仲地地区基本層序	1号～3号竪穴住居跡	4号・5号竪穴住居跡
図版3	10号竪穴住居跡	5号・6号土坑	10号土坑
図版4	1号井戸状遺構	1号溝状遺構	
図版5	自然地形落ち込み出土遺物	4号竪穴住居跡出土遺物	
	4号竪穴住居跡出土遺物	4号竪穴住居跡出土遺物	
	4号竪穴住居跡出土遺物	4号竪穴住居跡出土遺物	
	4号竪穴住居跡出土遺物	4号竪穴住居跡出土遺物	
図版6	4号竪穴住居跡出土遺物	10号竪穴住居跡出土遺物	
	10号竪穴住居跡出土遺物	10号竪穴住居跡出土遺物	
	10号竪穴住居跡出土遺物	10号土坑出土遺物	
	1号井戸状遺構出土遺物	II区ピット内出土遺物	

第I章 調査概要

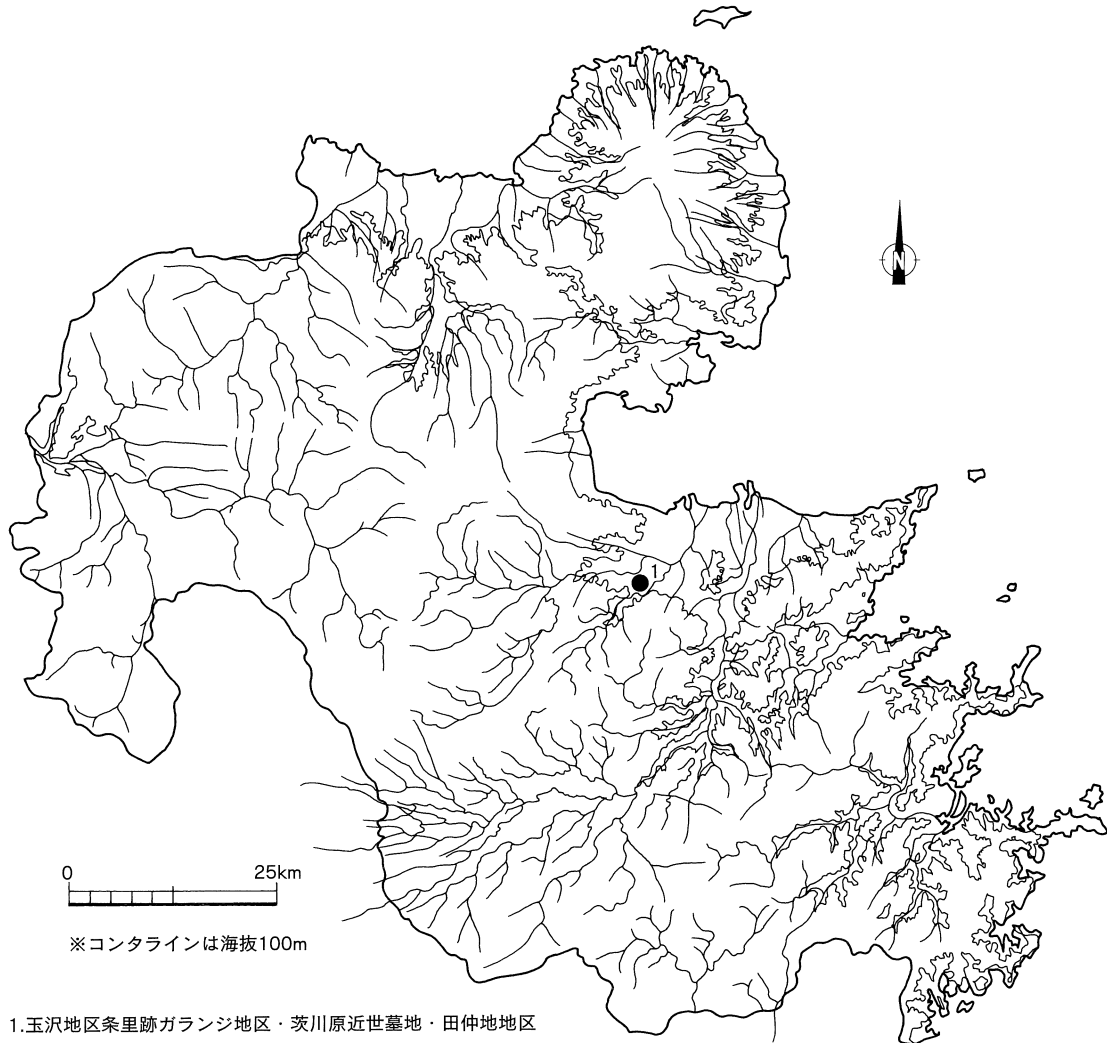
第1節 調査に至る経過

大分県土木建築部では、一般国道442号（木の上工区）について、昭和63年3月にルート選定、平成元年5月に道路改良工事の実施を決定した。木の上工区は玉沢地区条里跡南西部をほぼ南北に貫くもので、周囲の微高地には穂田市遺跡（縄文時代～中世：国道210号バイパス建設及び七瀬川改修工事に伴う調査）、ガランジ遺跡（弥生時代・中世：国道210号バイパス木の上工区建設に伴う調査）などが確認されている。工区内にも同様な微高地が存在すること、さらに、条里に伴う遺構及び遺物の存在が想定されたため平成9年2月19日に土木建築部より路線内の遺跡の取り扱いについて協議がもたれた。この結果、平成9年3月18日～24日にかけて試掘調査を実施し、大分市大字口戸字伽藍地・茨川原・田仲地など計3箇所に遺構・遺物を確認した。このため、平成9年7月17日～8月6日に字茨川原（茨川原近世墓地）、平成9年8月7～22日と平成10年10月28日～11月2日に字伽藍地（ガランジ地区）、平成9年8月26日～11月10日に字田仲地（田仲地地区）の調査区名称を決定し本調査を実施した。

参考文献

吉田 寛 『穂田市遺跡』七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1994

小柳和宏 『ガランジ遺跡 穂田市遺跡 穂田条里遺跡』国道210号バイパス(木の上工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997



第1図 調査遺跡位置図

第2節 調査の組織

平成9年度

調査主体 大分県教育委員会

教育長 田中恒治

文化課長 後藤一郎

調査指導 後藤宗俊 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授)

調査主任 清水宗昭 (同文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)

調査員 江田 豊 (同文化課主査：田仲地地区調査担当)

田中裕介 (同文化課主査：茨川原近世墓地調査担当)

友岡信彦 (同文化課主査：田仲地地区調査担当)

染矢和徳 (同文化課主任：ガランジ地区調査担当)

平成10年度

調査主体 大分県教育委員会

教育長 田中恒治

文化課長 後藤一郎

調査主任 清水宗昭 (同文化課課長補佐兼埋蔵文化財第2係長)

調査員 村上久和 (同文化課副主幹)

染矢和徳 (同文化課主任：ガランジ地区調査担当)

第3節 調査の経過

発掘調査は既述の調査組織で行なった。以下、年度ごとに該当調査区の調査経過を示す。なお、試掘調査は平成8年度に実施(試掘担当：大分県教育庁文化課 主査 玉永光洋・同文化課 主査 栗原 眞・染矢)したので、調査の経過のみ記すことにする。

平成8年度試掘調査

平成9年3月18日～24日にかけて、大分市大字口戸外に広がる工区(試掘調査対象面積：22400㎡)に試掘調査溝を14条設定し、遺構、遺物の確認を行なった。調査の結果、ガランジ地区からは弥生時代の遺物を含む溝状遺構1条、茨川原近世墓地は墓坑他、田仲地地区からはカマドを付設する竪穴住居跡2基を確認したため、次年度に前記3箇所の本調査実施を決定した。

平成9年度調査

平成9年7月24日に茨川原近世墓地の本調査を開始した。精査の結果、近世以降の墓坑約20基を確認し、8月7日に同地区の調査を終了した。

平成9年8月7日より木の上工区最北端に位置するガランジ地区の調査を開始した。精査の結果、弥生時代の土器片を含む溝状遺構を確認した。同区の調査は8月22日に終了した。

平成9年8月26日からは田仲地地区の調査を実施した。遺跡は削平が著しかったが、竪穴住居跡9基(古墳時代)、土坑18基(時期不明)、井戸状遺構1基(中世)、溝状遺構1条(中世)、ピット群(中世)を確認した。調査は11月10日に終了した。

平成10年度調査

本調査を実施したのはガランジ地区で、調査期間は平成10年10月28日～11月2日である。前年度の調査区を北側に拡大したもので、調査の結果、近世以降の水口状遺構及び水田跡と考えられる遺構を確認した。

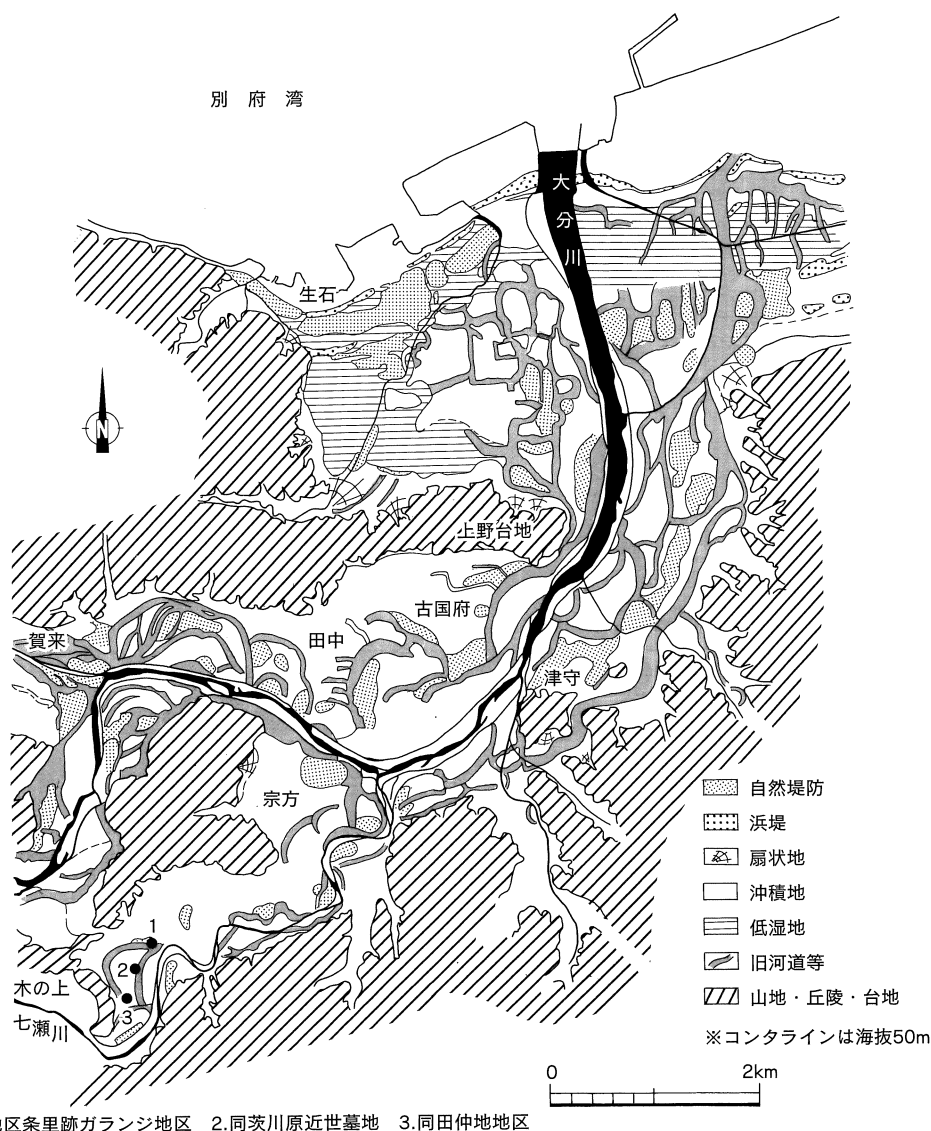
参考文献 吉田 寛編 『大分県埋蔵文化財年報』7 大分県教育委員会 1999

第Ⅱ章 地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

調査区は大分県大分市大字口戸方字伽藍地、茨川原、田仲地外に所在する。大分市の位置する大分平野は九州東部に広がるもので、北には瀬戸内海西端の別府湾、東には佐賀関半島から豊後水道、南には祖母傾山系、西には九重連山が展開している。近郊を見ると九六位山、靈山、障子岳、高崎山、雨乞岳といった400mから800mほどの山々が大分平野を北を除く三方から取り囲み、そのなかに大分県を代表する河川である大分川と大野川が別府湾へと注いでいる。これらの地形が当地方特有の気象を生み出しており、気候的には瀬戸内型が南海型や九州山地型に移行する遷移域にあるとされている。

大分平野の西部を流れる大分川中下流域には段丘が発達し、河口部には三角州・浜丘が形成されている。遺跡は大分川の河口から南西8kmほどの内陸に位置し、支流である七瀬川西岸の微高地上などに確認された。調査区周辺をみると、各所で現河道と旧河道が複雑に入り組んでおり、山地、丘陵、台地からは土砂が流れ出し、部分的に小規模な扇状地をつくるほか、新旧河道間には河岸段



第2図 大分川下流域沖積低地の地形分類図 (千田1987『大分市史』上 57頁第14図を一部修正し転載)

丘、自然堤防がよく発達し微高地を形成している。

遺跡の分布を見ると丘陵、台地、沖積地、河岸段丘、自然堤防の各所に確認されており、大分平野内でも屈指の遺跡密度を示している。特に河岸段丘、自然堤防上には弥生時代から中近世にわたる遺跡が分布しており、当地における開発史を如実に物語るものがある。この地域は現在でも集落、水田などに用いられ生活の場となっている。

今回報告する各遺跡の立地条件を見ると、ガランジ地区は七瀬川から200mほど離れた微高地上に位置する。現状の標高は16.4～17.9m前後で、水田及び宅地として用いられており、部分的に厚い客土を行なっていた。茨川原近世墓地は七瀬川から100mほど離れた水田（原状は氾濫原であったと推定される）のなかのマウンド状の盛り上がりの頂部平坦面に設けられていた。現状の標高は17.1m前後であった。田仲地地区は現河道から150mほど離れた七瀬川旧河道間に取り残された微高地上に位置する。現状の標高は18.4m前後で、水田として用いられており、全面的に削平を受けていた。

第2節 歴史的環境

調査区の周辺は前述したとおり、高い遺跡密度を持つ地域である。旧石器時代から縄文時代を見ると当該調査区の北東に位置する庄ノ原台地で、旧石器や押型文土器が出土している。弥生時代をみると、後漢鏡片と巴形銅器を出土した雄城台遺跡、後漢鏡片を出土した尼ヶ城遺跡と守岡遺跡、自然堤防、沖積地上には上片面遺跡、深町遺跡、植田平石遺跡、賀来中学校遺跡、ガランジ遺跡など大分平野の各所で弥生文化を享受した痕跡が残されている。古墳時代にいたると周辺の丘陵、台地上や斜面上に墳墓が集中的につくられることになる。亀甲山古墳・蓬莱山古墳・御陵古墳・大臣塚古墳（4C中頃～5C中頃）の前方後円墳に続き下ヶ迫古墳・世利門古墳（5C中頃）さらに、弘法穴古墳・千代丸古墳・丑殿古墳（6C後半～7C初頭）という石室古墳が出現するが、調査区周辺に所在する木ノ上峠横穴墓群、土肥横穴墓群、高瀬横穴墓群、岩崎横穴墓群、雄城台下横穴墓群のように大分県全域の特徴である横穴墓が同時に卓越した存在として出現する。最後に登場するのが被葬者に壬申の乱の乱に活躍した大分君が推定される古宮古墳（7C中頃～後半）である。集落跡をみると前記した尼ヶ城、守岡、雄城台遺跡は古墳時代前期までに廃絶する。代わって植田市遺跡、北ノ後遺跡、古国府石明遺跡、地蔵原遺跡が主要な集落として登場する。このことは、古墳時代に入り新たな社会秩序が成立していったことを窺わせるものである。特に地蔵原遺跡は8世紀後半から9世紀にかけて濠で囲まれた館が建つなど、郡衙的な発展を遂げるにいたる。しかしながら、大分平野内では古墳時代の集落跡の調査例は少なく資料の蓄積も充分でないことから今後の資料の増加に期待したい。

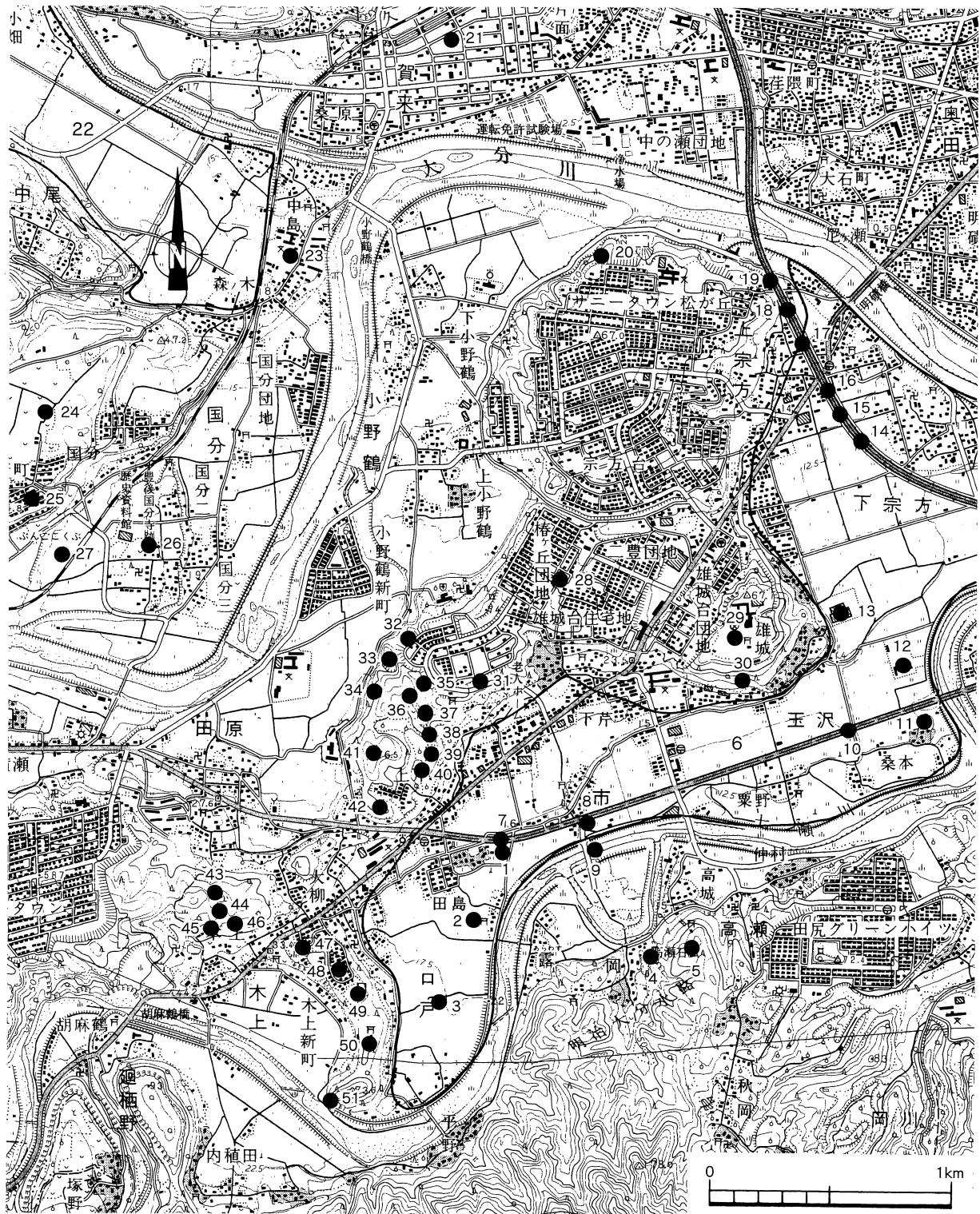
古代を見ると方形の地割から広範囲に条里跡が想定されているが、現在までの調査では明確な条里遺構を確認していない。調査区から北東約2kmに位置する古国府・羽屋地区は国府の所在地として推定されており、近年、奈良から平安期を中心とする時期の遺跡が徐々に確認されはじめている。調査区を含む周辺は同時代に『和名抄』によれば植田郷となるが、詳細はいまのところ知られていない。同郷は文献上遅くとも平安時代末期までには荘園化しており植田荘となっている。同荘は大分川南岸とその支流七瀬川流域の平野を中心に現大分市南西部（横瀬地区を除く植田地区、東植田地区）から野津原町（今市地区を除く）にかけての地域に比定されている。文献上の初見は保元2年（1157）の『太政官符案』で保元の乱で敗退した藤原頼長領を没官し、後白川天皇の後院領とした記事である。本来、この地は開発領主と推定されている大神氏（植田氏）の開発によるもので、『大神系図』によると、植田有綱が源平合戦の恩賞として吉藤名野津原郷を賜ったとあり、鎌倉時

代のはじめまでには大神系の植田氏がこの地を得ることになる。弘安8年(1285)の『豊後国岡田帳』には、植田荘は十名に分かれ、個々に地頭がいたことがわかる。南北朝期に入ると植田氏一族である靈山寺院主有快が上義・乙犬・上乙犬・下永富・吉藤・福重渡地内地行地半分地頭となり、領地の拡大をはたしている。建武3年(1336)には南朝方が国府(高国府)攻略を目指し植田荘内にある靈山寺を占拠し、靈山寺から国府に至る経路上にある有快の館を「在家数十軒」とともに焼き払うという記事が残されている。このことは、中世の段階で、地頭の館を中心に集村していたことを窺わせるものである。今日残る字名をみると、「乙院屋敷」「新屋敷」「寺屋敷」「田中屋敷」「田代屋敷」「八幡田屋敷」「内屋敷」「外屋敷」「ヤシキ」の地名を残していることから「屋敷」を中心に集落を形成していった可能性がある。このように、植田氏は地頭として各名の経営にあたるが、鎌倉時代中期にいたり、植田惣領家は守護大名大友氏より養子を迎え入れ実質的には大友系となる。そして、戦国期には植田氏も滅亡し、植田荘は大友家臣の給地として分割されることになる。

近世になると七瀬川上流域より木の上村(延岡藩領)、口戸村(延岡藩領)、市村(臼杵藩領)、粟野村(延岡藩領)、桑本村(臼杵藩領)、雄城村(延岡藩領)、下宗方村(臼杵藩領)、上宗方村(臼杵藩領)となる。各村ともに前述した自然堤防上、微高地上に集村した形態をとるもので、今日でも村境には同時代に建立された六地藏石幢などの石造物を随所にみることができ往時の面影を色濃く漂わせている。延岡藩、臼杵藩の支配は幕末まで続き近代を迎えることになる。

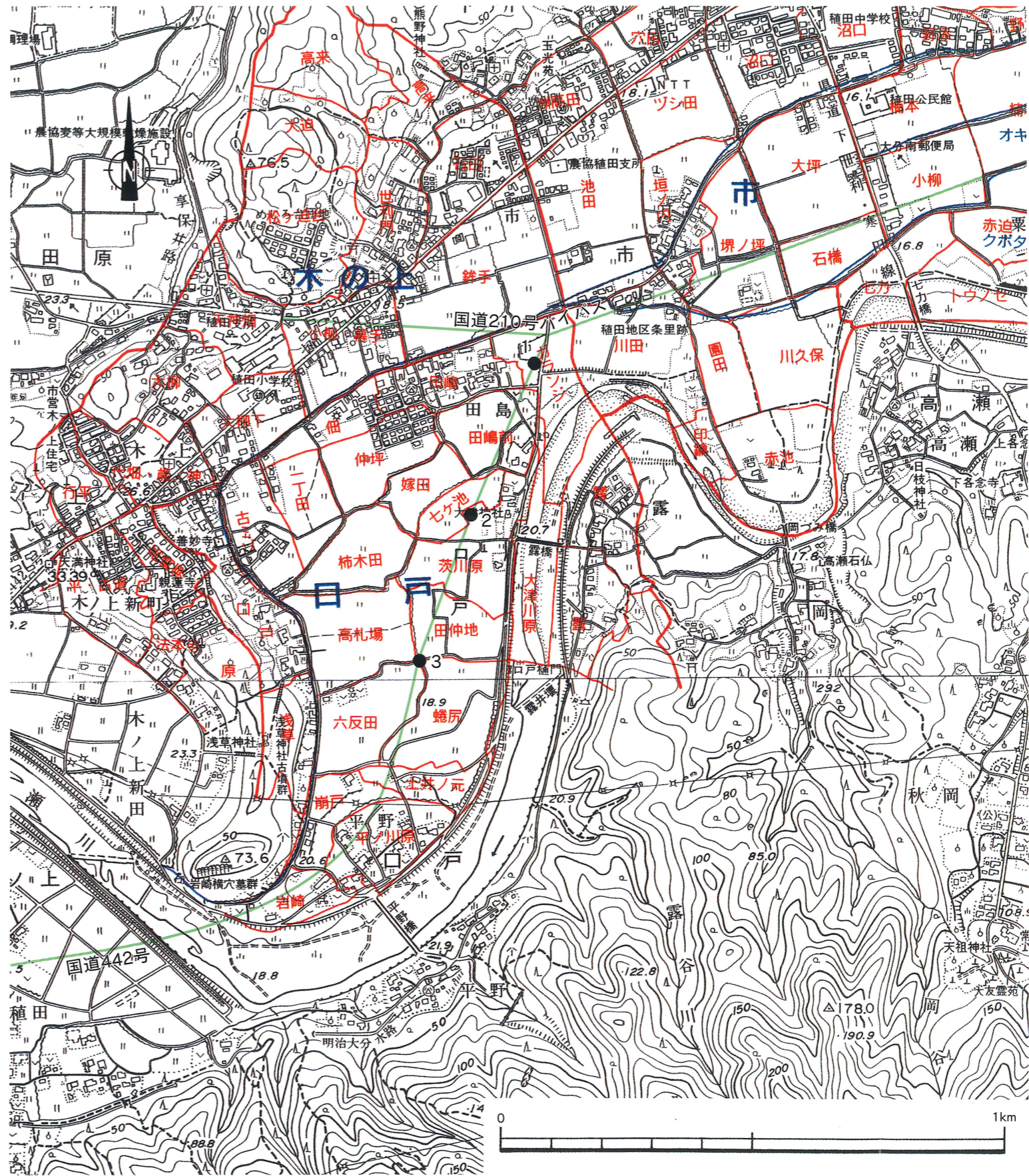
参考文献

- 富来隆・中村俊一・杉崎重臣「庄/原遺跡」『大分市の文化財』3 大分市教育委員会 1962
 清水宗昭・渋谷忠章『下黒野遺跡』大分県教育委員会 1974
 真野和夫「蓬萊山古墳」『日本考古学年報』27 日本考古学協会 1976
 羽田野光洋『守岡遺跡』大分市教育委員会 1979
 真野和夫『豊後国分寺』大分市教育委員会 1979
 讃岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査-大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から-」『大分県地方史』117号 大分県地方史研究会 1984
 『大分県史』先史編Ⅱ 大分県 1983
 『大分県史』古代編Ⅱ 大分県 1983
 『大分市史』上 大分市 1987
 吉田寛『大分市植田市遺跡の調査概要』3 大分県教育委員会 1987
 吉田寛『植田市遺跡』Ⅰ 大分県教育委員会 1988
 吉田寛『植田市遺跡』Ⅱ 大分県教育委員会 1989
 吉田寛『植田市遺跡』Ⅲ 大分県教育委員会 1990
 吉田寛『植田市遺跡』Ⅳ 大分県教育委員会 1991
 綿貫俊一『賀来中学校遺跡』大分県教育委員会 1992
 坪根伸也『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1992
 渡辺澄夫『豊後国荘園公領史料集成』五(下) 別府大学附属図書館 1993
 吉田寛『植田市遺跡』七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1994
 染矢和徳『植田平石遺跡』精神保健センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1994
 中野幡能監修『大分県の地名』日本歴史地名大系第45巻 平凡社 1995
 高橋徹 江田豊 田中裕介 友岡信彦 染矢和徳『机張原遺跡 女狐近世墓 庄/原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 大分県教育委員会 1996
 坪根伸也 塩地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ-羽屋・井戸遺跡とその周辺の調査から-」『大分県地方史』163号 大分県地方史研究会 1996
 小柳和宏『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』国道210号バイパス(木の上工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997
 染矢和徳『馬姓遺跡 北/後遺跡 乙院屋敷遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 大分県教育委員会 1999



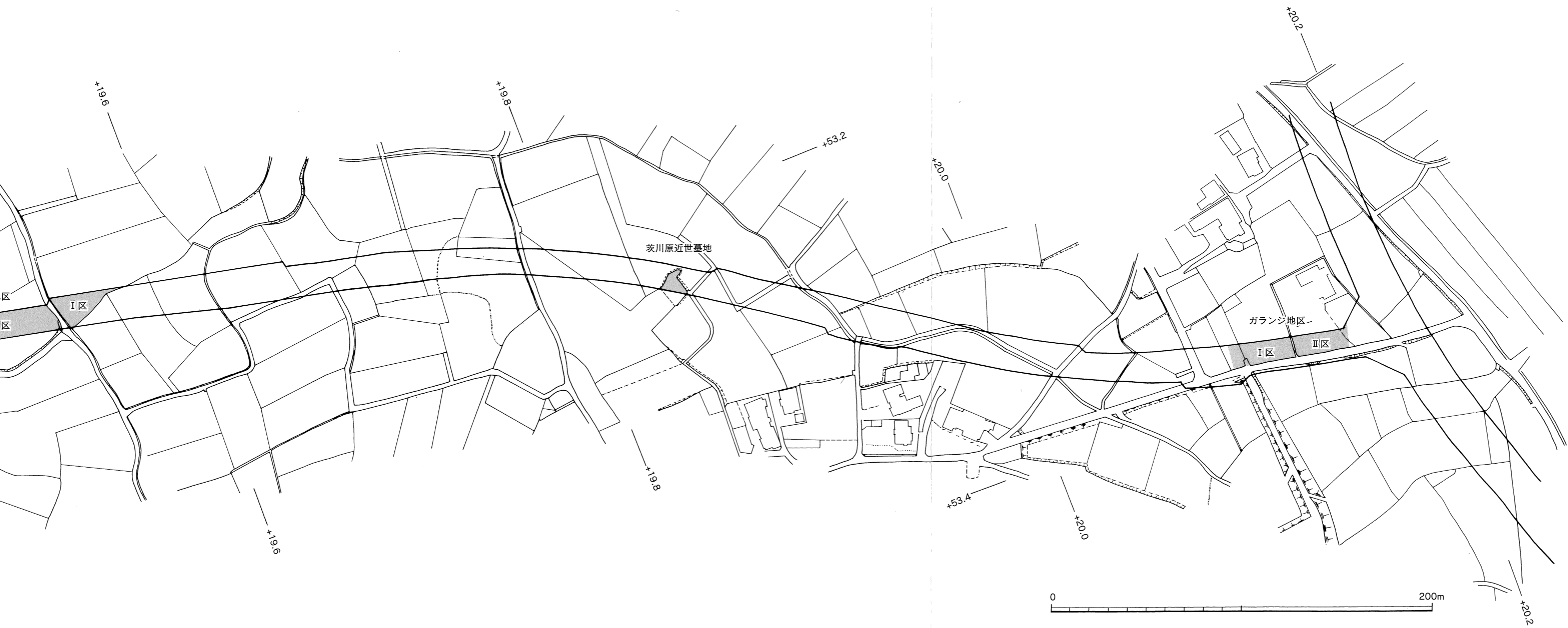
第3図 調査遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院「大分」2万5千分の1地形図より転載)

- 1.玉沢地区条里跡ガランジ地区 2.玉沢地区条里跡茨川原近世墓地 3.玉沢地区条里跡田仲地地区 4.高瀬横穴墓群 5.高城山城跡 6.玉沢地区条里跡
- 7.ガランジ遺跡(国道210号線バイパス建設に伴う発掘調査) 8.植田市遺跡(国道210号線バイパス建設に伴う発掘調査)
- 9.植田市遺跡(七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査) 10.植田条里遺跡(国道210号線バイパス建設に伴う発掘調査) 11.桑本館跡 12.植田平石遺跡
- 13.深町遺跡 14.玉沢地区条里跡二反田地区 15.玉沢地区条里跡山伏田地区 16.玉沢地区条里跡六反田地区 17.乙院屋敷遺跡 18.北/後遺跡
- 19.馬姓遺跡 20.小野鶴横穴墓群 21.上片面遺跡 22.賀来条里跡 23.賀来中学校遺跡 24.国分台遺跡 25.六重原遺跡 26.豊後国分寺跡
- 27.国分遺跡 28.椿ヶ丘横穴墓群 29.雄城台遺跡 30.雄城台下横穴墓群 31.下迫古墳 32.大曾横穴墓群 33.大曾2横穴墓群 34.大曾3横穴墓群
- 35.六部塚古墳 36.漆間横穴墓群 37.虎御前古墳 38.高来山横穴墓群 39.漆間古墳 40.世利門古墳 41.大將軍古墳 42.稲荷古墳 43.山伏古墳群
- 44.木ノ上峠横穴墓群 45.志土地横穴墓群 46.土肥横穴墓群 47.木ノ上古道石棺 48.御陵古墳 49.千人塚 50.浅草神社古墳群 51.岩崎横穴墓群



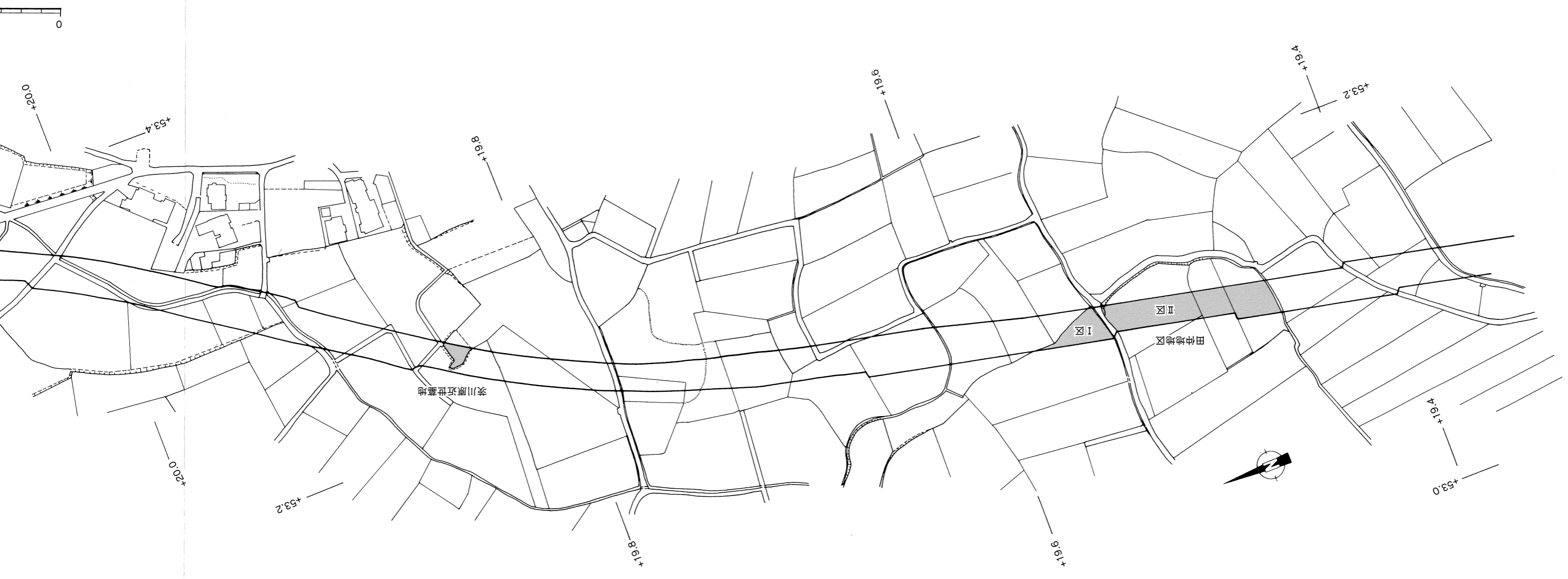
1. ガランジ地区 2. 茨川原近世墓地 3. 田仲地地区

第4図 調査区周辺地形図(1) (『ガランジ遺跡 種田市遺跡 種田条里遺跡』国道210号バイパス(木の上工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997 付図より転載)



第5図 調査区周辺地形図②

第5图 調査区周辺地形図②



第Ⅲ章 ガランジ地区

第1節 調査概要

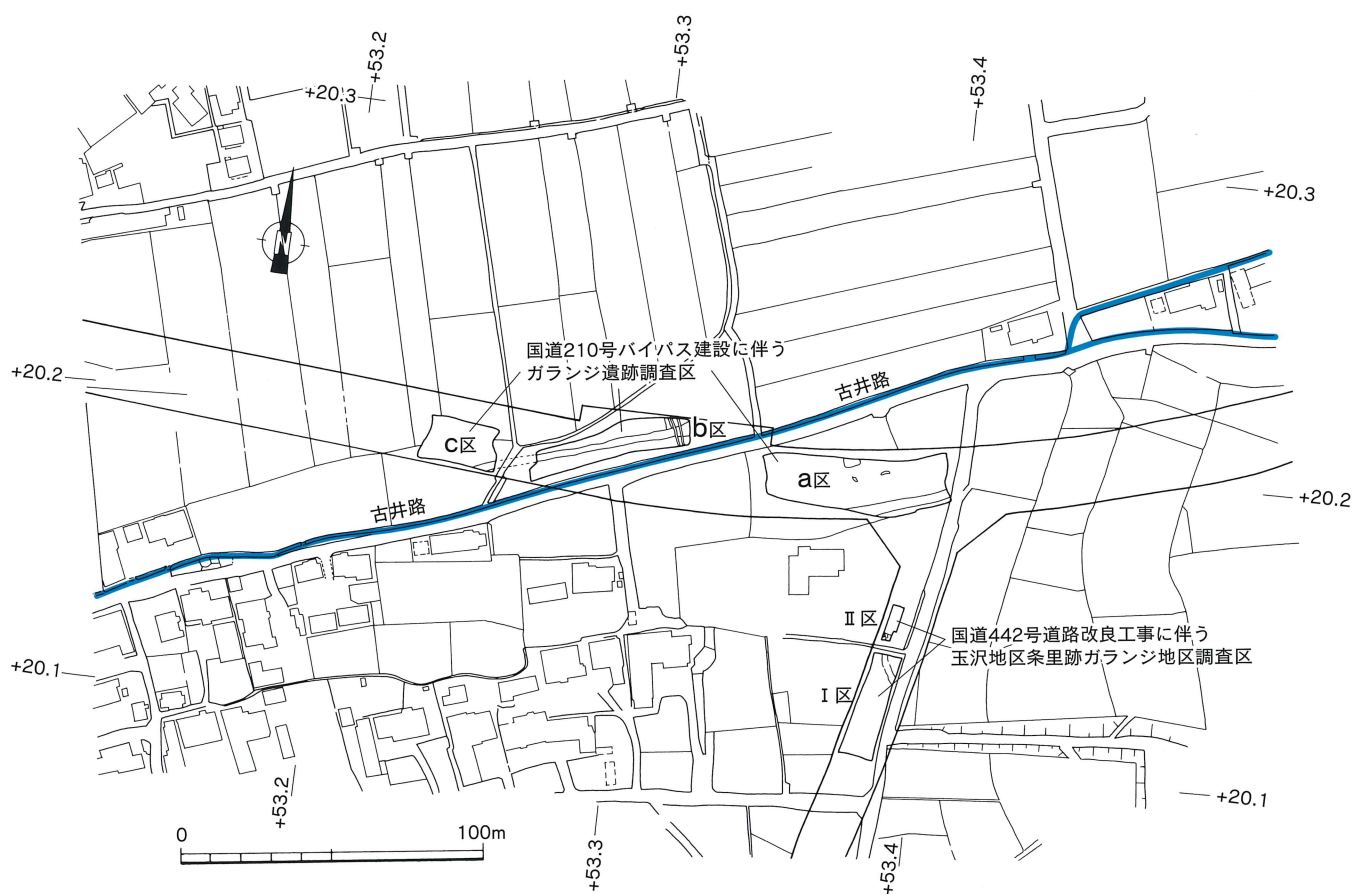
ガランジ地区は今回の調査で最も北に位置するものである。発掘調査は、用地買収の進捗状況から平成9年8月7日～22日と平成10年10月28日～11月2日の2回に分けて実施した。この為、前者をI区、後者をII区と便宜上設けた。

当該区の北隣は平成2年10月から11月にかけて、国道210号バイパス建設に伴うガランジ遺跡の発掘調査が行なわれている。遺跡a区～c区を設定しており、a区は竪穴住居跡1基(弥生時代後期中葉)、土坑2基(時期不明)、溝1条(中世)、b区は溝1条(中世)、c区は溝1条(b区溝の延長と推定)がそれぞれ確認されている。調査の結果から、集落跡を調査区の北側に想定、a区の溝は現在の古井路に並行するもので、その前身としb区・c区の溝にとってかわられるとしている。

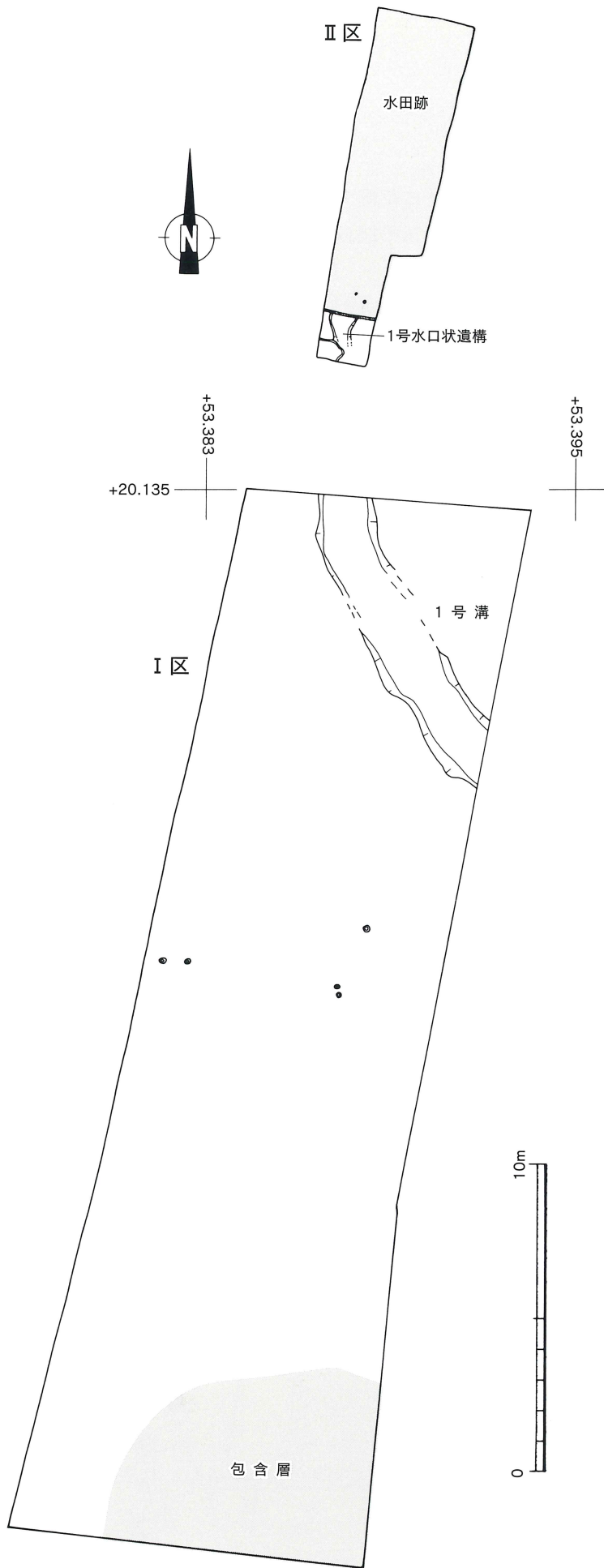
今回は、以上のようなガランジ遺跡の存在からか、同様の遺跡の広がりか想定されたため調査を実施するに至った。当該区は七瀬川より北へ100m前後離れており、微高地状の地形を呈している。現況はI区が水田、II区が宅地に用いられており削平が顕著であった。調査前の標高はI区が16.430m、II区が17.910mで、遺構検出面の標高は両区ともに16.100m前後(I区・II区共に表土層及び客土層を除去するとただちに遺構面となる)である。原状は検出面の標高より高いものと推定される。確認された遺構はI区が北端に溝1条、中央部にピット6基、南端に遺物包含層、II区が北半分に水田跡、南半分に水口状の遺構をそれぞれ確認した。遺物はI区の溝から多数の土器片を出土したほかはほとんど確認されなかった。

参考文献

小柳和宏『ガランジ遺跡 稲田市遺跡 稲田条里遺跡』国道210号バイパス(木の上工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997



第1図 玉沢地区条里跡ガランジ地区周辺地形図

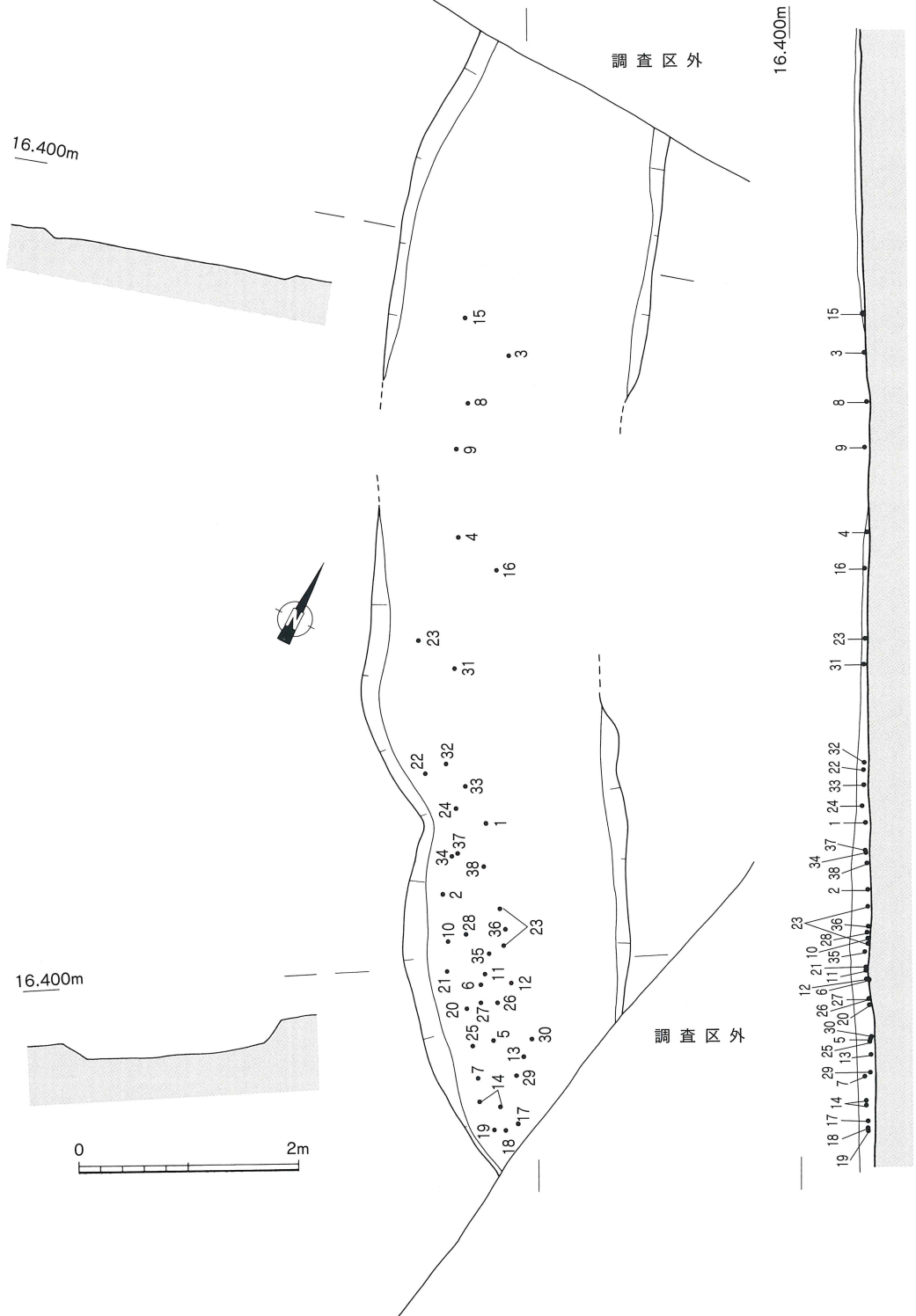


第2図 ガランジ地区遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1号溝

溝はI区の北端に位置するもので、北北西から南南東の方向にのびている。確認できた全長は10.23m、最大幅2.38m、最大深23cmである。埋土は暗褐色土の単層で、遺構の立ち上がりは明瞭である。溝内からは土器片が多数出土しているが、西側に偏ったかたちで確認された。出土状況から遺物は溝の西側から流れ込んできたと推定される。

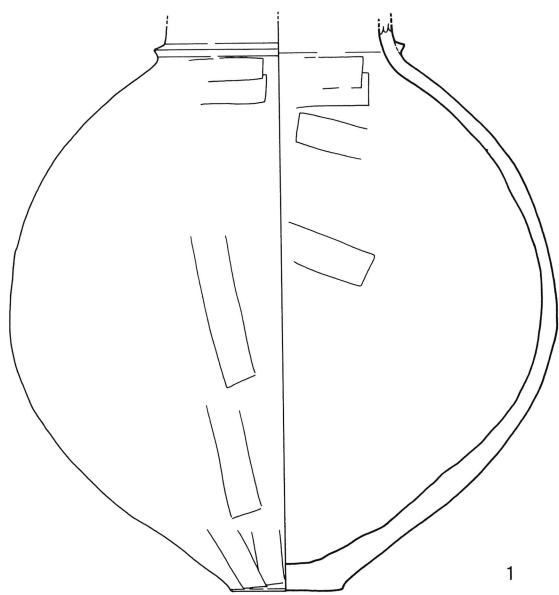


第3図 1号溝実測図

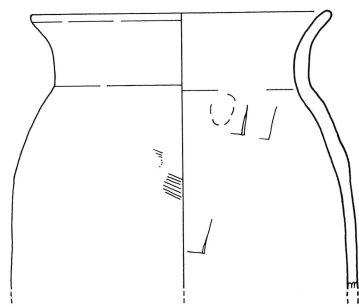
1号溝出土遺物

1は壺の頸部から底部、2～5は複合口縁壺の口縁部～頸部である。1の胎土には長石、角閃石、石英が含まれる。頸部には断面三角形の突帯を張り付けている。外面調整は突帯付近が横ナデ、胴部は僅かにハケ目を残し、底部は不定方向ナデを観察できる。内面調整は頸部が横ナデ、胴部に僅かにハケ目を残し、底部付近はヘラナデ及び不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。胴部最大径は29.0cmである。2の胎土には石英、角閃石、長石、赤色砂粒が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は口縁部が横ナデと波状文、頸部にはハケ目と横ナデを残す。内面調整は指圧痕及び横ナデと不定方向ナデを確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄色である。復元口径は14.9cmである。3の胎土には長石、角閃石、雲母が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は横ナデ後、ヘラ状工具によるハの字状の刻目を残している。内面調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。復元口径は19.2cmである。4の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は口縁部が横ナデ後、ヘラ状工具によるハの字状の刻目を施し、頸部には横ナデとハケ目を観察できる。内面調整はヘラナデ後、横ナデを施している。焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面が明灰白色である。復元口径は17.8cmである。5の胎土には長石、石英、角閃石、雲母が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は口縁部が横ナデ後、ヘラ状工具によるハの字状の刻目を施し、頸部には横ナデ及び不定方向ナデを残している。内面調査は横ナデ及び不定方向ナデと指圧痕を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。復元口径は23.6cmである。

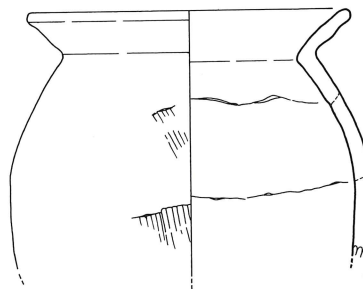
6～21は甕の口縁部から胴部である。6の胎土には角閃石、長石、金雲母、赤色砂粒が含まれる。外面調査は口縁部が横ナデとハケ目、頸部以下にはハケ目を残している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはヘラナデと不定方向ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は22.4cm、胴部最大径は21.9cmである。7の胎土には角閃石、長石、金雲母、赤色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデを施している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には指圧痕及びヘラナデと不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。復元口径は16.0cmである。8の胎土には長石、角閃石、石英、金雲母、赤色砂粒が含まれる。遺物内面及び断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目と不定方向ナデが観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。復元口径17.2cmである。9の胎土には長石、角閃石、石英、白色砂粒が含まれる。遺物内面及び断面には粘土積み上げ痕を残す。外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、頸部以下にはハケ目を僅かに残している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。復元口径は21.5cmである。10の胎土には長石、角閃石、石英が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、頸部以下には不定方向ナデを施している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は21.6cmである。11の胎土には角閃石、長石が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、頸部以下にはハケ目が観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には薄くハケ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰褐色である。復元口径は24.8cmである。12の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれる。内外面の調整は口縁部から頸



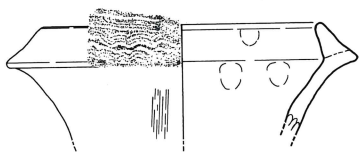
1



7



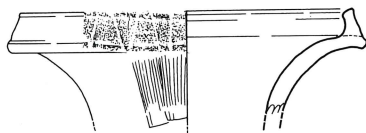
8



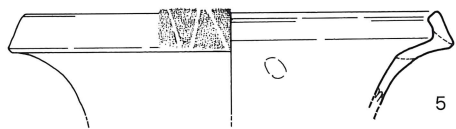
2



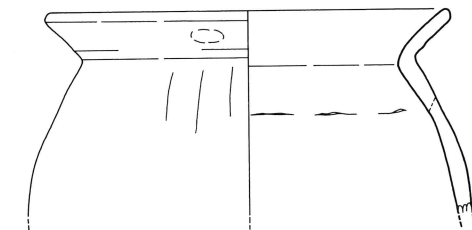
3



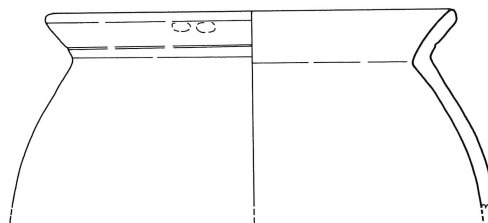
4



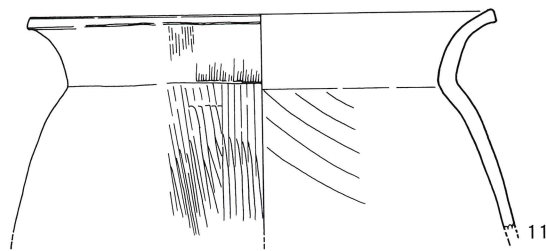
5



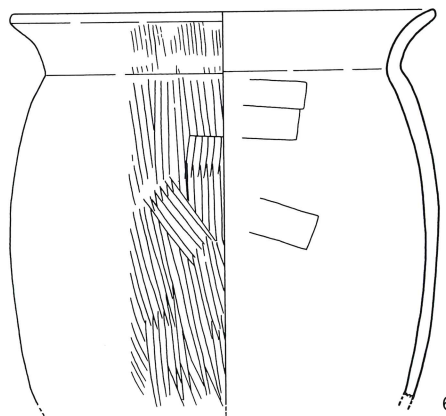
9



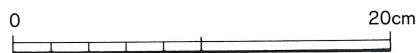
10



11



6



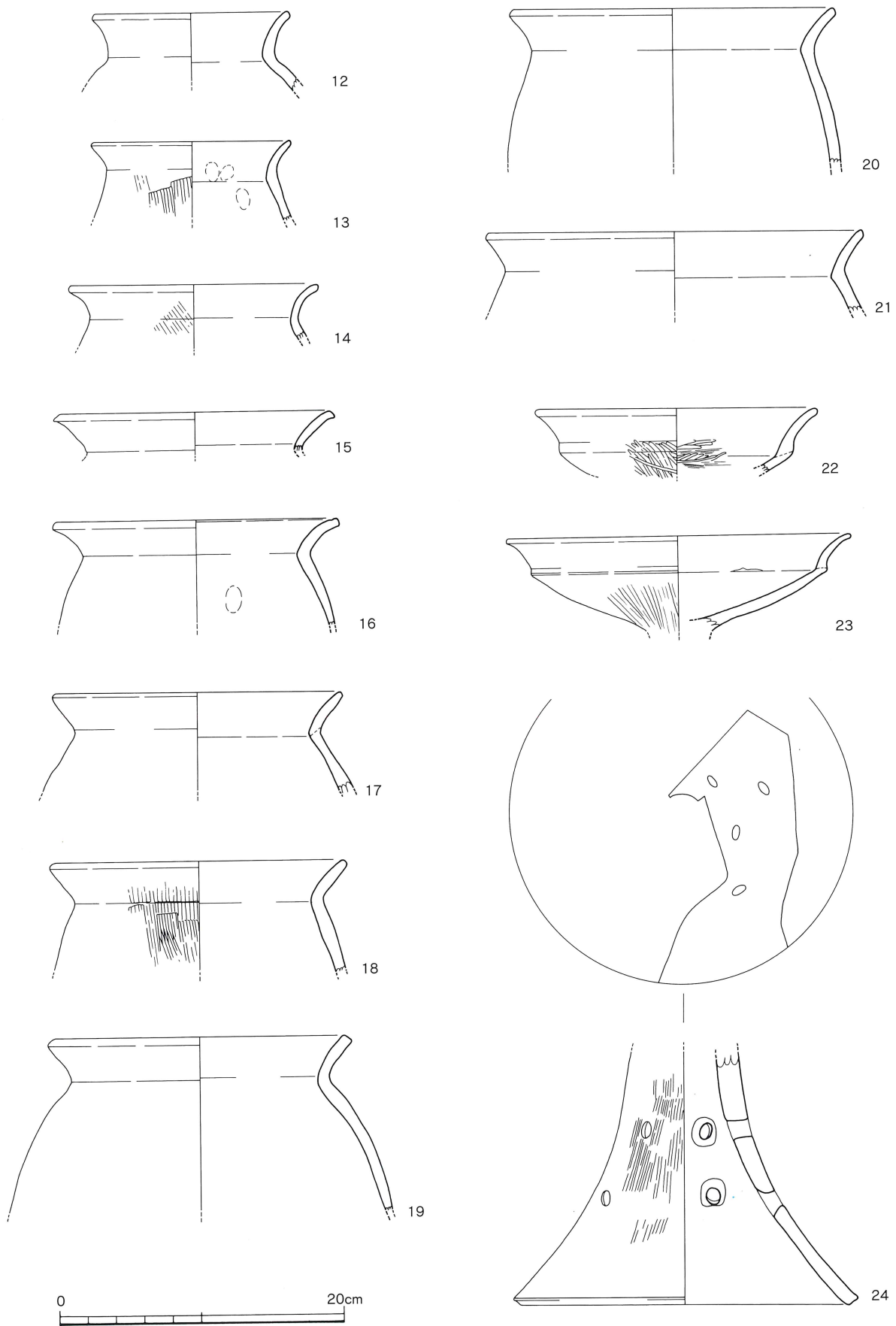
第4图 1号沟出土遗物实测图(1)

部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径14.0cmである。13の胎土には長石、石英、角閃石が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデとハケ目、頸部以下にはハケ目を観察できる。内面調整は口縁部から頸部が横ナデと指圧痕、頸部以下には不定方向ナデと指圧痕を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は14.0cmである。14の胎土には長石、石英、角閃石が含まれる。外面調整は横ナデとハケ目、内面調整は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。復元口径17.4cmである。15の胎土には石英、角閃石、赤色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗橙色である。復元口径は18.8cmである。16の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを残している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデと指圧痕を施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は20.1cmである。17の胎土には長石、石英、角閃石、金雲母が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。調整は内外面ともに器面剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。復元口径は20.0cmである。18の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれる。外面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下はハケ目を残している。内面調整は口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は20.8cmである。19の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は21.3cmである。20の胎土には長石、石英、角閃石が含まれる。調整は内外面ともに口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデが観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径は22.9cmである。21の胎土には長石、角閃石、白色砂粒、赤色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下には不定方向ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙褐色である。復元口径は26.5cmである。

22・23は高坏の坏部、24は高坏の脚部である。22の胎土には長石、角閃石、石英、金雲母、赤色砂粒が含まれる。断面には粘土積み上げ痕を残している。外面調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下には丁寧な磨きが施される。内面調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下には丁寧な磨きとハケ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。復元口径は19.4cmである。23の胎土には長石、角閃石、金雲母、赤色砂粒が含まれる。遺物内面及び断面には粘土積み上げ痕を残す。外面調整は口縁部が横ナデ、口縁部以下にはハケ目と不定方向ナデがみられる。内面調整は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径は24.3cmである。24の胎土には長石と角閃石が含まれる。外面調整はハケ目と不定方向ナデ、内面調整は不定方向ナデと僅かにヘラナデが観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。復元底径は24.1cmである。

25は鉢の口縁部から胴部である。胎土には長石、角閃石、石英が含まれる。調整は内外面ともに口縁部から頸部が横ナデ、頸部以下にはハケ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面胴部に煤の付着がみられる。復元口径は22.0cm、胴部最大径は23.2cmである。

26・27は壺である。26の胎土には石英、長石、角閃石、赤色砂粒が含まれる。外面調整は粗いヘラナデと不定方向ナデを残している。内面調整は僅かにハケ目が残存する。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面に煤の付着がみられる。底径は3.8cmである。27の胎土には石英、長石、角閃石が含まれる。外面調整はハケ目及び不定方向ナデと指圧痕を残している。内面調整はハケ目と不定方向ナデが観察できる。焼成は良好で、色



第5图 1号沟出土遗物实测图(2)

調は内外面ともに黄褐色である。口径は10.6cm、器高は10.3cmである。

28～38は壺及び甕の底部である。28の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整はハケ目と不定方向ナデを残している。内面調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が茶褐色である。遺物は二次加熱を受けており、内面に炭化物が付着している。底径は4.7cmである。29の胎土には長石、石英、角閃石が含まれる。外面調整はハケ目及び不定方向ナデと指圧痕である。内面調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色である。遺物は二次加熱を受けており、内面に炭化物が付着している。復元底径は4.5cmである。30の胎土には長石、角閃石が含まれる。外面調整はハケ目、横ナデ、不定方向ナデ、指圧痕がみられる。内面調整は不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。復元底径3.8cmである。31の胎土には長石、角閃石、金雲母が含まれる。外面調整は指圧痕と不定方向ナデである。内面調整は不定方向ナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗黄褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。復元底径は4.0cmである。32の胎土には長石、角閃石、赤色砂粒が含まれる。調整は内外面ともに不定方向ナデである。底径は4.5cmである。33の胎土には長石、石英、角閃石、赤色砂粒が含まれる。外面調整は不定方向ナデである。内面調整は指圧痕と僅かにハケ目を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。底径は5.7cmである。34の胎土には長石、石英、角閃石が含まれる。外面調整は不定方向ナデである。内面調整はハケ目と不定方向ナデを観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は3.8cmである。35の胎土には長石、角閃石が含まれる。外面調整は僅かにハケ目と不定方向ナデを残している。内面調整は僅かにハケ目と指圧痕を観察できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は2.4cmである。36の胎土には長石、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整はハケ目と不定方向ナデである。内面調整は不定方向ナデと指圧痕である。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。底径は4.3cmである。37の胎土には長石、石英、角閃石、白色砂粒が含まれる。外面調整はハケ目と不定方向ナデである。内面調整はハケ目、不定方向ナデ、指圧痕、ヘラナデを残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。遺物は二次加熱を受けており、全面に煤の付着がみられる。底径は4.3cmである。38の胎土には長石、角閃石、石英が含まれる。外面調整はハケ目と不定方向ナデである。内面調整はハケ目及び不定方向ナデと指圧痕を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。底径は5.0cmである。

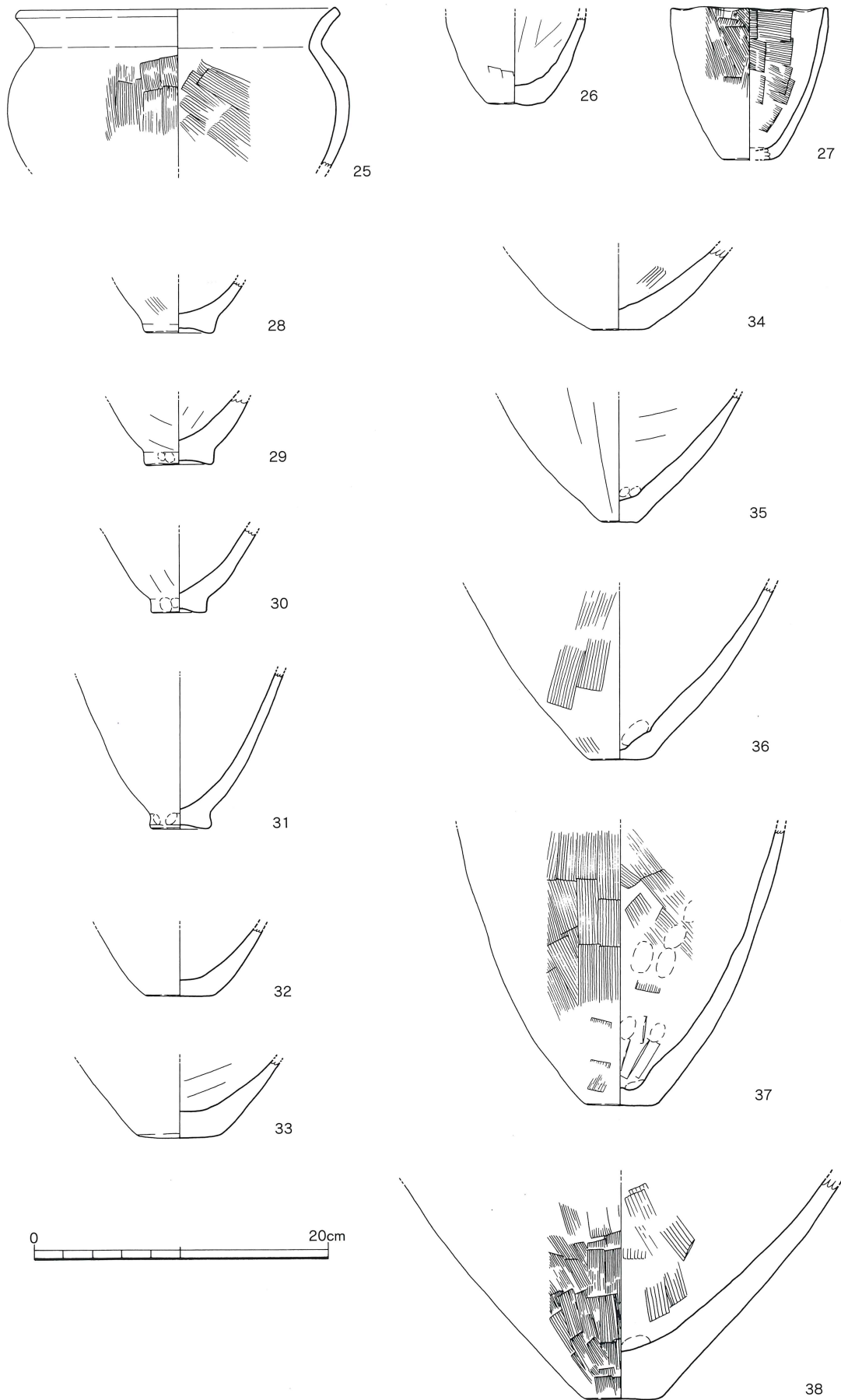
1～5は弥生時代後期前葉から中葉、6～38は弥生時代後期中葉から後葉と考えたい。

ピット

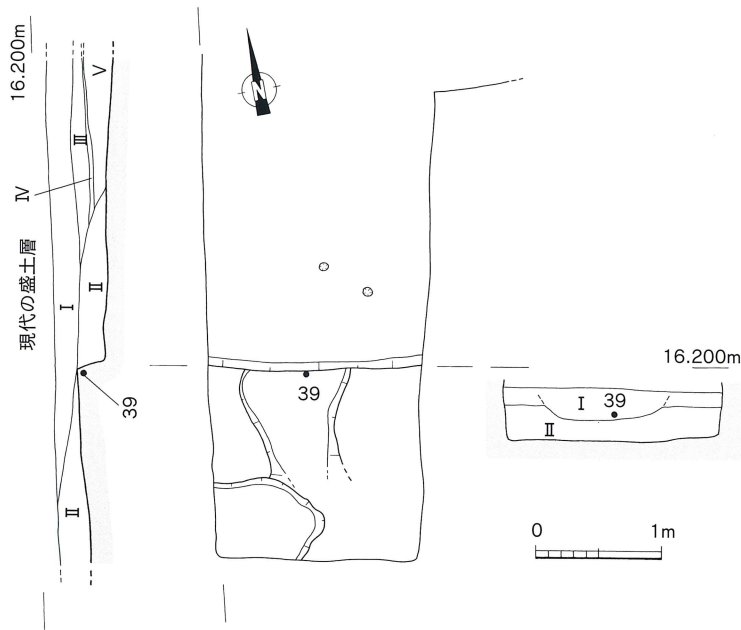
I区中央部に6基を確認した。残存状況は悪く、規模は最大のもので直径32cm、最大深3cm、最小のもので直径20cm、最大深1cm程である。遺物は出土しておらず遺構の時期は不明である。

遺物包含層

包含層はI区南端で確認された。遺物は豆粒大の土器細片が20点程出土したが時期を特定できるものはない。



第6图 1号沟出土遗物实测图(3)



第7図 1号水口状遺構実測図

1号水口状遺構

遺構はII区の南端に位置する。遺構は2箇所の浅い掘り方と2箇所の杭痕からなる。確認できる規模は、南側の掘り方で65cm×97cm、最大深3cmで立ち上がりは不明瞭である。北側の掘り方は87cm×95cm、最大深は12cmで立ち上がりは不明瞭である。2つの掘り方北側には2箇所に杭痕を遺す。杭痕は極めて浅く1cm程しかない。遺構は出土遺物から18世紀後半から幕末を中心とした時期に使用されたものと考えられる。

1号水口状遺構出土遺物

39は肥前系磁器白磁紅皿で、型打ち整形である。口径は4.4cm、器高は1.4cmである。遺物は18世紀後半から幕末の製品である。

水田跡

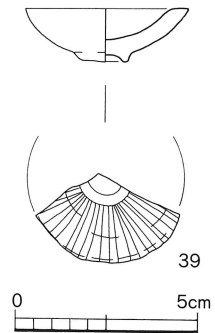
水田面と考えられるのは上図I層、III層、V層である。各層から遺物は出土しなかった。1号水口状遺構から出土した遺物よりI層は18世紀後半から幕末を中心とした時期、III層・V層はそれ以前の時期と考えられる。

第3節 小 結

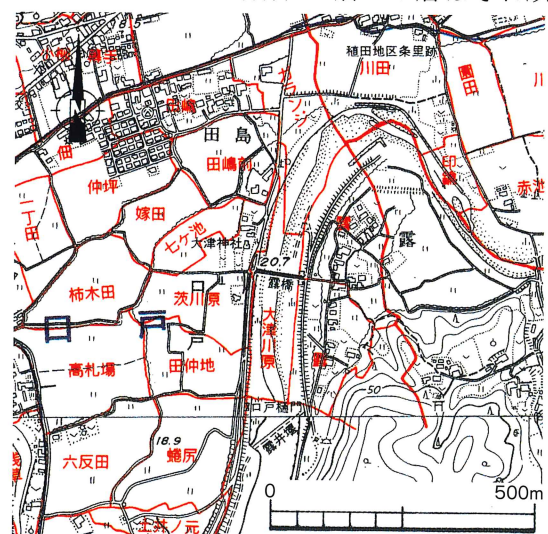
I区より確認された1号溝は弥生時代後期の遺物を出土しているが、同期を溝の使用された時期とするには、国道210号バイパス建設に伴うガランジ遺跡で確認された溝跡の状態を考えると消極的にならざるをえない。1号溝のほぼ延長線にある小字「大津川原」の北側への広がりを見ると大分川からの導水の可能性を指摘しておきたい。II区で確認された1号水口状遺構及び水田跡から、ガランジ遺跡a区とガランジ地区II区との間の浅い谷部に近世以前から水田が開削されたと推定できる。

註(1)『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』国道210号バイパス(木の土工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書大分県教育委員会 1997 7頁～10頁で取り上げた溝1・溝2の遺物出土状況及び掘削状態からガランジ地区I区の1号溝は中世に遡る可能性がある。

- I層：暗褐色弱粘質土
水口状遺構の掘り方であり、近世の水田面と考えられる。下位には酸化鉄の沈着が僅かにみられる。
- II層：褐色粘質土
I区遺構検出面と同層、酸化鉄の沈着がみられることから、水田の畦畔と考えられる。水口状遺構の掘削は同層まで達している。
- III層：暗灰色弱粘質土
水田面と考えられる。酸化鉄の沈着が全体に僅かに観察できる。
- IV層：暗黄色弱粘質土
酸化鉄の沈着が多量みられる。III層の水田床土と考えられる。
- V層：灰色弱粘質土
水田面と推定され、下位には酸化鉄の沈着が僅かにみられる。



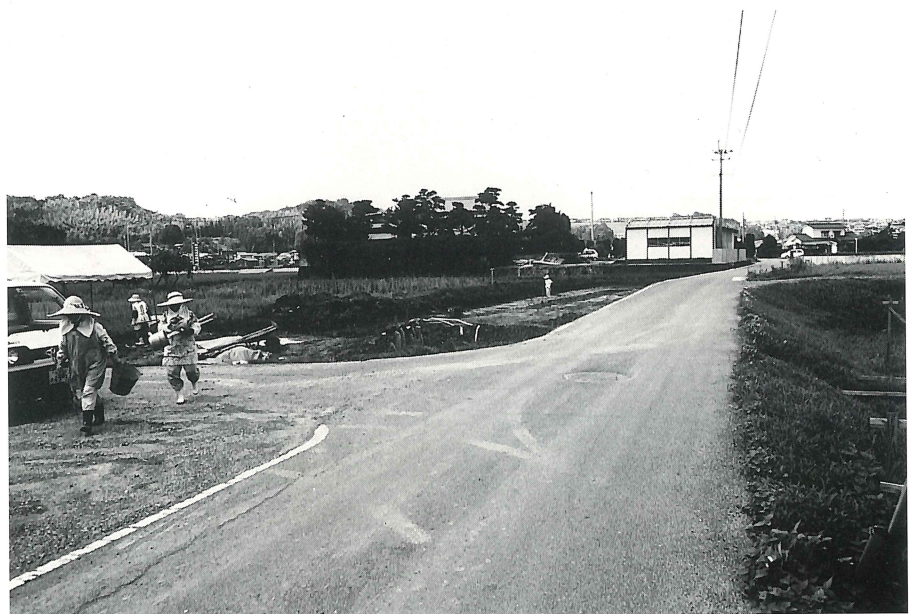
第8図 1号水口状遺構出土遺物実測図



第9図 ガランジ地区周辺字図(『ガランジ遺跡 植田市遺跡 植田条里遺跡』 国道210号バイパス(木の土工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1997付図より転載)



ガランジ地区遠景



ガランジ地区全景



ガランジ地区 I 区全景

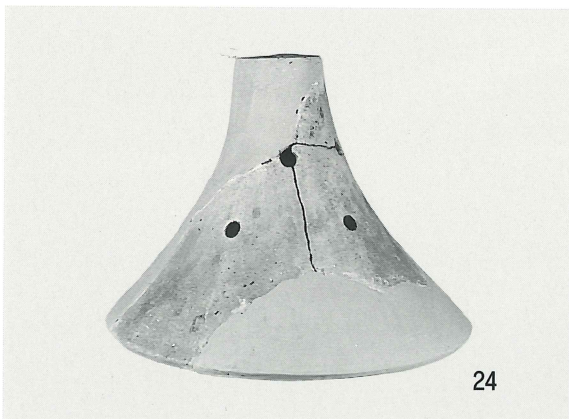
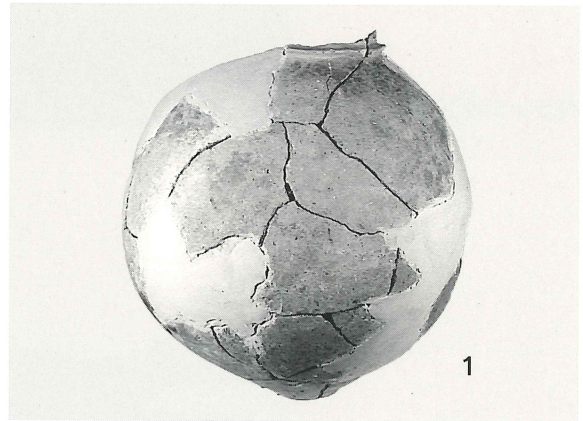
図版2



ガランジ地区Ⅱ区全景



ガランジ地区Ⅱ区1号水口状遺構



第Ⅳ章

茨川原近世墓地

第1節 調査概要

茨川原近世墓地は大分市大字口戸字茨川原に所在する近世の墓地遺跡である。調査面積はわずかに200㎡足らずであるが、近世を中心とする墓坑19基と6基の墓石を調査した。また最近まで墓石が旧状のまま残っていたことが移転時の記録から判明し、それから復元すると21基以上の墓石が正面を東に向けて南北に列状に配置されていたものと推定される。墓石以外の供養塔などの付属施設は存在しなかったようである。そして推定される墓石の型式から、18世紀前半から19世紀代の墓地であることが判明した。

この近世墓地は近在の角家所有の古墓であって、現在角家邸の敷地内には新墓としての累代墓が建てられており、また200年近い存続期間のあいだに20基程度の埋葬という比率からみても、また聞き取りによっても、角家一家系による近世墓とみて間違いのないようである。

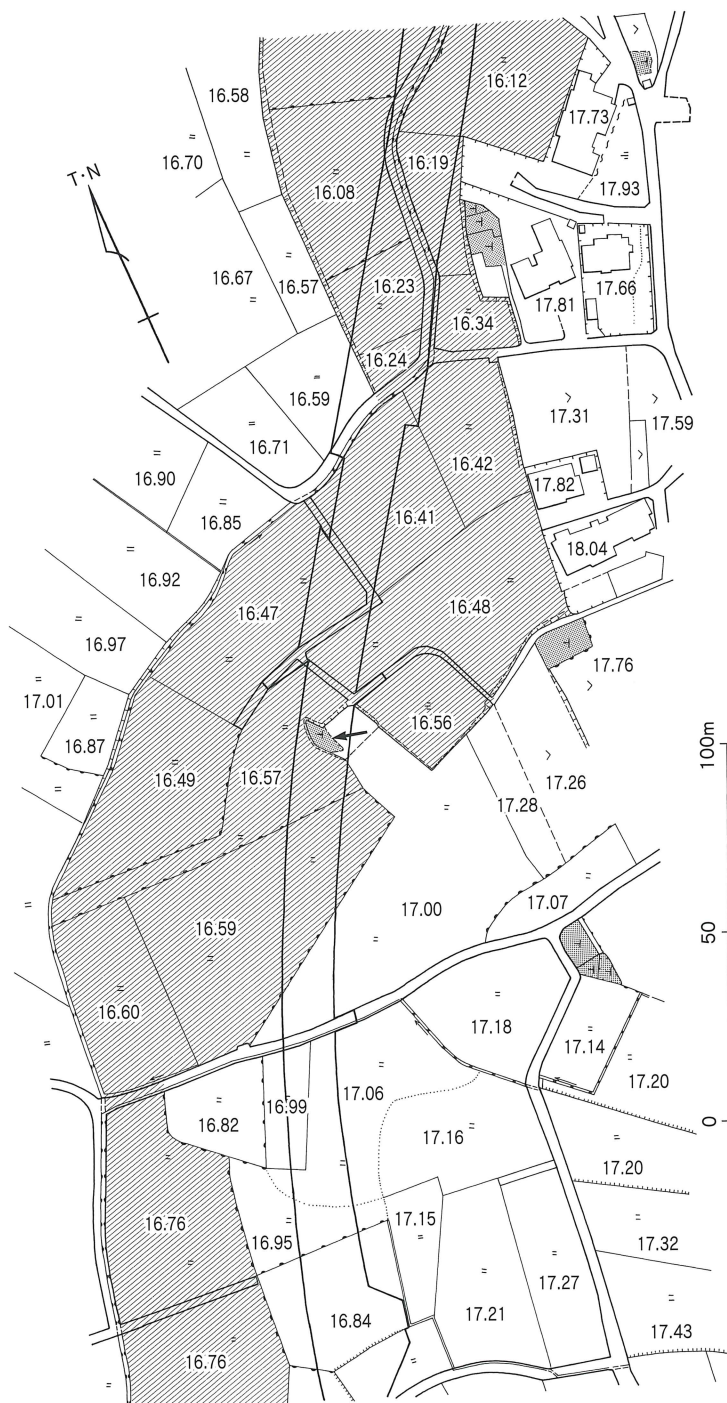
第2節 立地と環境

(第1図、写真1・2)

茨川原近世墓地は七瀬川の旧氾濫原内の微高地上に位置した小さな高まり上(標高16~17m)に存在する。第1図にトーンでしめしたように、1段低くなった水田面が帯状に連なり、かつてその部分は七瀬川の旧河道のひとつであったことを推測させる。茨川原近世墓地の位置する高まりはその旧河道に向かって突出するように伸びている。おそらく河道およびその周辺の水田化の際に除去した砂層を盛り上げた人工の高まりであると推測される。

さて茨川原近世墓地の所在する大分市大字口戸は、中世の大分郡植田荘に属し、近世では18世紀初めの正徳2年以後延岡藩領口戸村となり明治維新にいたる。その後は大分郡口戸村となり、明治22(1889)年に植田村、昭和30(1955)年大分村に、その2年後大分町そして現在の大分市となったのは昭和38(1963)年であった。

ところでこの茨川原近世墓地は一家族による小規模な近世墓地と考え



第1図 茨川原近世墓地と周辺の景観(1/200)



写真1 遠景 (南から)



写真2 茨川原近世墓地全景 (西から)

られるが、周辺の大字口戸地区での近世墓の様相は、いくつかの家族が集合して形成された大規模な近世共同墓地はほとんどなく、茨川原墓地のような一近世家族による小規模な墓地が、宅地脇あるいは周辺に点在する。このような近世墓地のありかたは、中世以来の伝統的な村落が近世村落に移行した大分市内の農村部で広く認められる。

第3節 墓地の旧状と現状 (第2・4図)

調査着手時には、墓石はすでに移転しており、現地には墓石の本体3基と台石3基を残すのみであった。1号と2号の台石は第1遺構面で検出された1号墓と2号墓のそばで、表土にめりこむように検出されたが、下部には墓坑はなくすでに移動したものとみてよい。

また調査に入った際にはすでに工事用機械の搬入のために高まりの西北部先端は除去されていた。そのためその先端部に存在した2ないし3基の墓坑はすでに失われたものと考えられる。

ところで移転前の状況から推察すると、いずれの墓石も下部の埋葬施設の腐朽にともなう陥没をこうむっていないらしく、実際調査した墓坑内に墓石が落ち込んだ状態も見られなかった。したがって埋葬直後の墓石建立は考えがたく7回忌などの忌日に建立したものと考えられる。

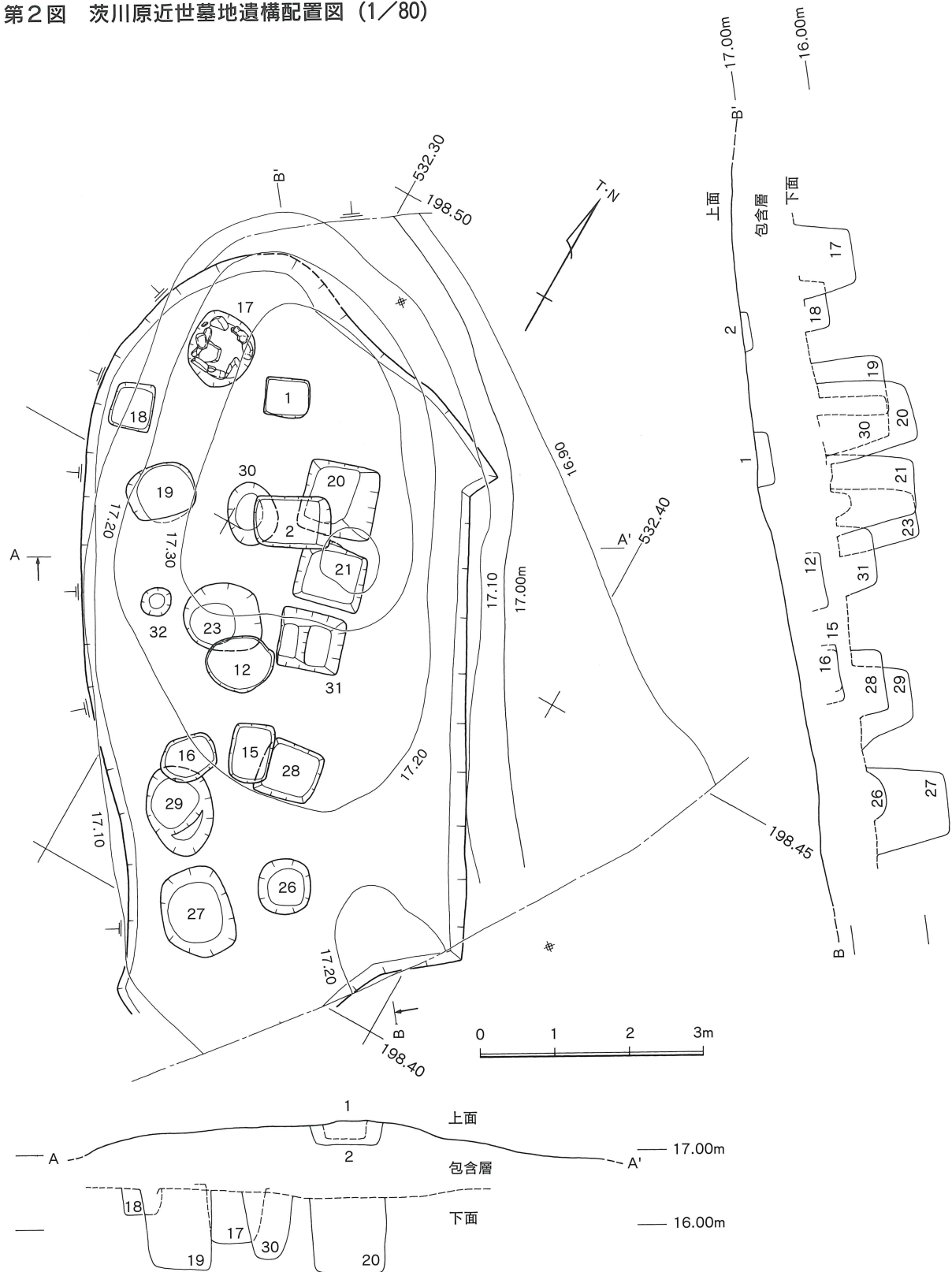
第4節 調査の方法 (写真3・4)

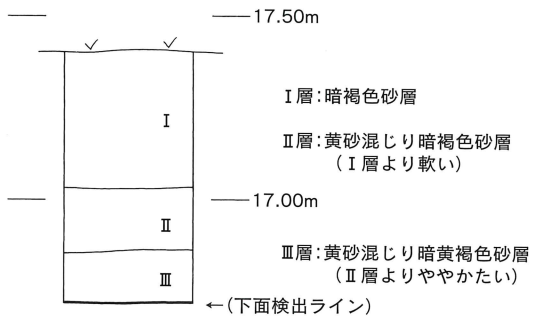
まず表土を除去する前に草刈りを行い、墓地内に残された墓石の採集を行なった。その墓石をとりのぞいたうえで、表土のみを薄く剥ぎ、遺構検出と平板測量をおこなった。その際上面遺構群の掘り込まれている砂層が、厚い近世遺物の包含層であることが判明したため、高まり全体に十字形の土層観察用ベルトを残して掘り下げた。その結果約60cm下で遺物の出土がなくなり、かつ砂層が

硬化したので、その面（第2遺構面）で再び遺構検出作業をおこない墓坑群を検出して掘り下げた。

なおこの墓地の掘りこまれた基盤の層序は、第3図に示すように、現表土から40cmほどは暗褐色の砂層（I層）で、この層の上面で墓坑群を検出した。I層の下には、黄砂混じり暗褐色砂層が堆積し、I層よりも柔らかかった。その下はふたたびやや硬くなった黄砂混じり暗黄褐色砂層のIII層が堆積している。このうち特に下部のII・III層から多くの近世遺物が出土した。

第2図 茨川原近世墓地遺構配置図（1/80）





第3図 包含層層序柱状図 (1/20)

調査日誌抄

1997 (平成9) 年

7月24日(木) 重機による表土剥ぎ(～25日)。器材搬入。上面で墓坑と思われる土坑状遺構があらわれはじめる。砂層中の遺構なので検出がむずかしい。

25日(金) 12号墓坑より土師質小皿2枚が出土。

28日(月) 上面遺構の掘り下げを継続し、墓坑の写真撮影と測量用の杭打ちを行なう。

29日(火) 上面の遺構の実測と、平板測量を行なう(～30日)。

30日(水) 包含層掘り下げ(～31日)。現場に残る墓石の実測と写真撮影を行なう。

8月1日(金) 下面遺構検出。包含層の遺物実測と取り上げ(～4日)。

5日(火) 下面墓坑の実測と遺物取り上げを行なう(～6日)。

7日(木) 現地調査終了。器材撤収。



写真3 包含層掘り下げ中(北から)



写真4 調査風景

例言

1. 本章に使用した方位は真北である。
2. 現地調査時の遺構実測には田中と染矢があたり、写真撮影は田中がおこなった。
3. 整理作業時の遺物実測・浄書・図版作成には、麻生廣美・大倉久美子と田中があたり、遺物の写真撮影には田中が当たった。なお、近世陶磁器の観察は、吉田寛の協力を得た。
4. 本章の編集と執筆は田中が当たった。

第5節 石製墓碑の記録

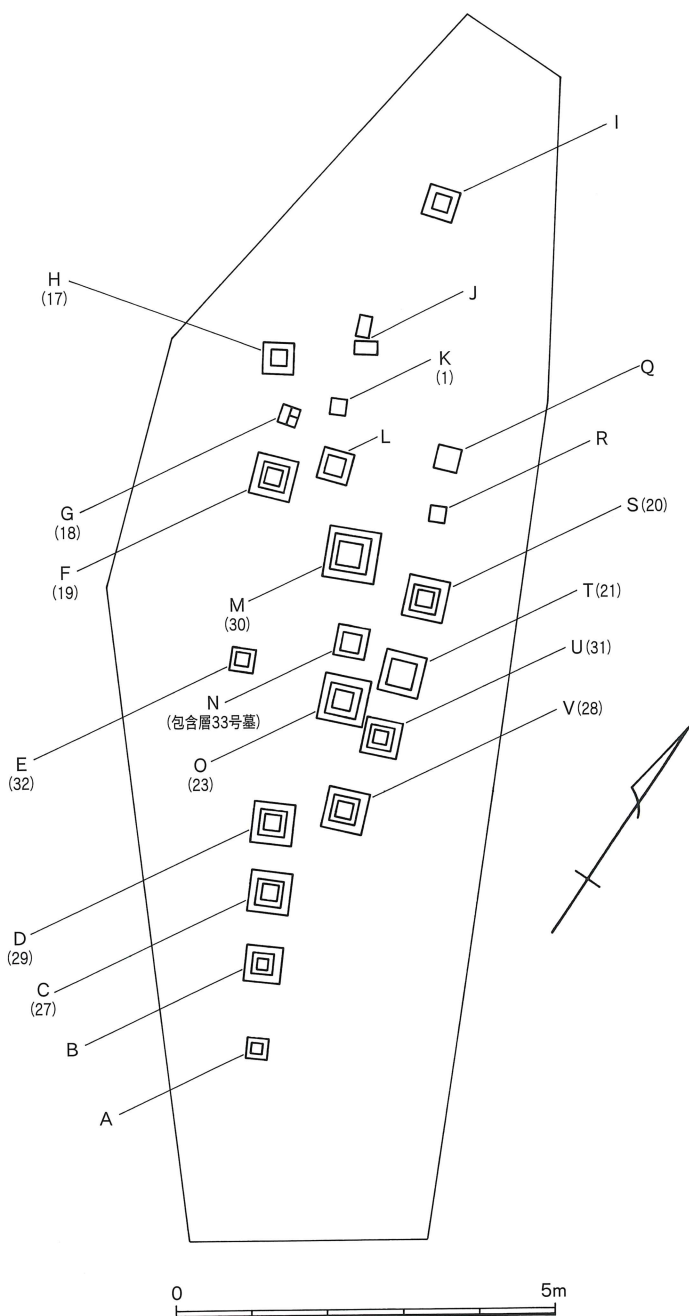
以下に茨川原近世墓地の石製墓碑として報告するものは、調査開始時には現地にはなく用地買収にともなう記録に残された墓石と、調査時に現地で確認した残存する墓石の双方である。

前者の墓石は現在角家に寄せられているが、すでに新墓のそばにまとめられているため個々の墓石の調査は割愛し、用地買収時の記録をもとに配置と墓石の種類を復元した。

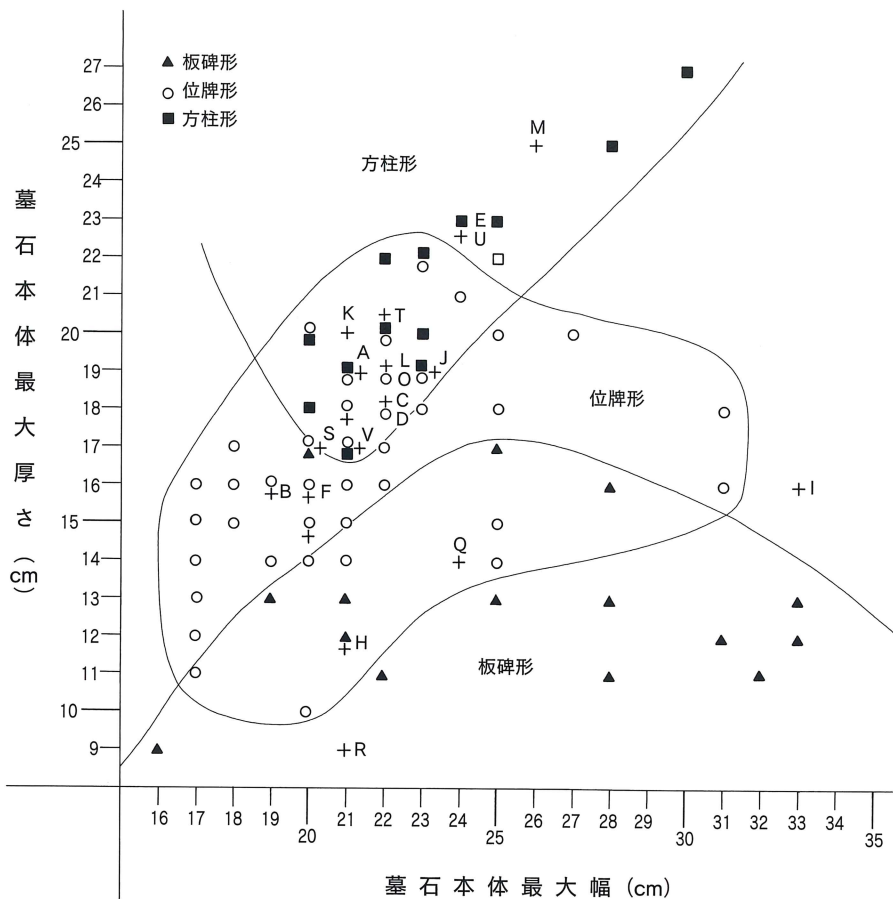
1) 撤去された墓石 (第4・5図、第1表)

用地買収時の記録によると第4図のようにかつて墓石22基が存在していた。墓石は東側に正面を向けて、南北に配列され中央では前後三列に配置されていたようである。この墓石の配置を調査で検出された墓坑と重ねあわせておおよその対応関係を第4図に括弧描きで注記しておいた。この関係は明瞭に認められるので、墓石の移動はあまりなかったものと考えられる。移転前の墓石調査ができなかったことが惜まれる。

この記録にはさらに墓石の寸法と台石の配置および寸法が記載されている。記載は各墓石の高さと正面の幅、側面の幅すなわち厚さの記載があるのみで墓石本体の形式を判断できるのはG号墓石がおそらく地藏浮彫と推定される仏像形である。ほかの墓石は記録そのものからは形式の判定は困難である。しかし寸法が判明しているので、その記載を正しいと仮定して第5図のようにグラフをつくり、本体寸法と墓石形式の対応が判明している大分市内の他の二ヶ所の近世墓地の資料と比較してみた。一般に近世の墓石は、板碑形・位牌形・方柱形の順に変遷し、その変化にしたがって墓石の横断面形が肉薄から肉厚へ、すなわち墓石本体の横幅に対して奥行つまり厚さが増す傾向にあることが考えられるからである。第5図の黒塗りつぶしが女狐近世墓地(註1)、白抜きが中尾近世墓地(註2)である。茨川原近世墓地を含めた3遺跡の寸法を比較すると、横幅に対して厚さが薄い板碑形の一群と、横幅に対



第4図 茨川原近世墓地墓石配置図 (1/100)



して厚さが厚く断面形が正方形に近くなる方柱形とが明瞭に分離し、その両者に重なる中間に位牌形の墓石が分布することが判明した。さらに茨川原近世墓地の各墓石寸法を第1表にしたがってにこの図に落とし墓石本体形式の推定を試みた結果が第1表である。

以上のような操作の結果かつて存在した22基の墓石の内訳は、板碑形2基・位牌形2基・方柱形3基、板碑または位牌形2基、位牌または方柱形11基、仏像形1基と判明した。以上のように推定できるものの、墓石形式をひとつに限定できない

第5図 墓石本体横断面寸法と墓石形式の相関

ものが半数を越えるという限界があるが、板碑形の墓石の存在を推定できたことは墓地の開始年代を考える上で重要である。すなわち板碑形の存在からみてこの墓地は18世紀前半代に埋葬がはじまることが考えられ、19世紀代まで継続したことが判明した。

註1 田中裕介「女狐近世墓地」『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』(九州横断自動車道埋蔵文化財発掘調査報告5)1996 大分県教育委員会
 註2 吉田寛『中尾近世墓地』1999 大分県教育委員会

第1表 茨川原近世墓地撤去墓石一覧表

No	本体形式 (推定)	台石	対応墓坑	寸法 (cm)
A	位牌または方柱	一段	—	本体=高さ58・幅 21・厚さ19 台石=幅 43・奥行31・高さ18
B	位牌または方柱	二段	—	本体=高さ51・幅 19・厚さ16 台石上=幅 32・奥行29・高さ16 台石下=幅 50・奥行47・高さ15
C	位牌または方柱	二段	27号墓	本体=高さ57・幅 22・厚さ18 台石上=幅 32・奥行28・高さ14 台石下=幅 50・奥行47・高さ15
D	位牌または方柱	二段	29号墓	本体=高さ53・幅 22・厚さ18 台石上=幅 32・奥行29・高さ14 台石下=幅 50・奥行47・高さ15

No	本体形式 (推定)	台石	対応墓坑	寸法 (cm)
E	方柱形	一段	32号墓	本体=高さ68・幅 24・厚さ23 台石=幅 37・奥行34・高さ18
F	位牌形	一段	19号墓	本体=高さ39・幅 20・厚さ16 台石=幅 34・奥行34・高さ15
G	仏像形	—	18号墓	本体=高さ43・幅 20・厚さ15
H	板碑または位牌	一段	17号墓	本体=高さ63・幅 21・厚さ12 台石=幅 30・奥行23・高さ15
I	板碑形	一段	—	本体=高さ75・幅 33・厚さ16 台石=幅 45・奥行37・高さ15
J	位牌または方柱	2墓	—	本体=高さ64・幅 23・厚さ19 台石=幅 64・奥行22・高さ15
K	位牌または方柱	—	1号墓	本体=高さ50・幅 21・厚さ20
L	位牌または方柱	一段	—	本体=高さ53・幅 22・厚さ19 台石=幅 37・奥行37・高さ15
M	方柱形	三段	30号墓	本体=高さ68・幅 26・厚さ25 台石上=幅 40・奥行38・高さ21 台石中=幅 55・奥行52・高さ20 台石下=幅 73・奥行75・高さ18
N	位牌形	一段	33号墓	本体=高さ41・幅 20・厚さ15 台石=幅 35・奥行35・高さ15
O	位牌または方柱	二段	23号墓	本体=高さ61・幅 22・厚さ19 台石上=幅 34・奥行31・高さ18 台石下=幅 66・奥行59・高さ15
Q	板碑または位牌	—	—	本体=高さ55・幅 24・厚さ14
R	板碑形	—	1	本体=高さ40・幅 21・厚さ 9
S	位牌または方柱	二段	20号墓	本体=高さ47・幅 20・厚さ17 台石上=幅 31・奥行28・高さ18 台石下=幅 51・奥行47・高さ15
T	位牌または方柱	二段	21号墓	本体=高さ53・幅 22・厚さ20 台石上=幅 35・奥行33・高さ20 台石下=幅 51・奥行50・高さ18
U	方碑形	二段	31号墓	本体=高さ49・幅 24・厚さ23 台石上=幅 37・奥行33・高さ20 台石下=幅 51・奥行50・高さ18
V	位牌または方柱	二段	28号墓	本体=高さ52・幅 21・厚さ17 台石上=幅 32・奥行29・高さ18 台石下=幅 46・奥行43・高さ15

2) 残存墓石 (第6図、第2表)

墓石はすでに移転しており、現地には墓石の本体3基と台石3基を残すのみであった。6号と4号の台石は第1遺構面で検出された1号墓と2号墓のそばで、表土にめりこむように検出されたが、下部には墓坑はなくすでに移動したものとみてよい。ほかの四個の墓石も墓地周辺の草むら内で採集したもので、移転時に残されたものと推定される。したがっていずれの墓石もどの墓坑に伴うものか不明である。しかし墓石の形式と銘文からこの近世墓地の存続年代を推定する有力な資料となるので、ここに詳細を報告する。

ところで3号地蔵丸彫型の「童子」墓石は、実測報告されたものとしては初めての調査例であり、幼児墓の墓石本体の一形式として加えるべきものである。

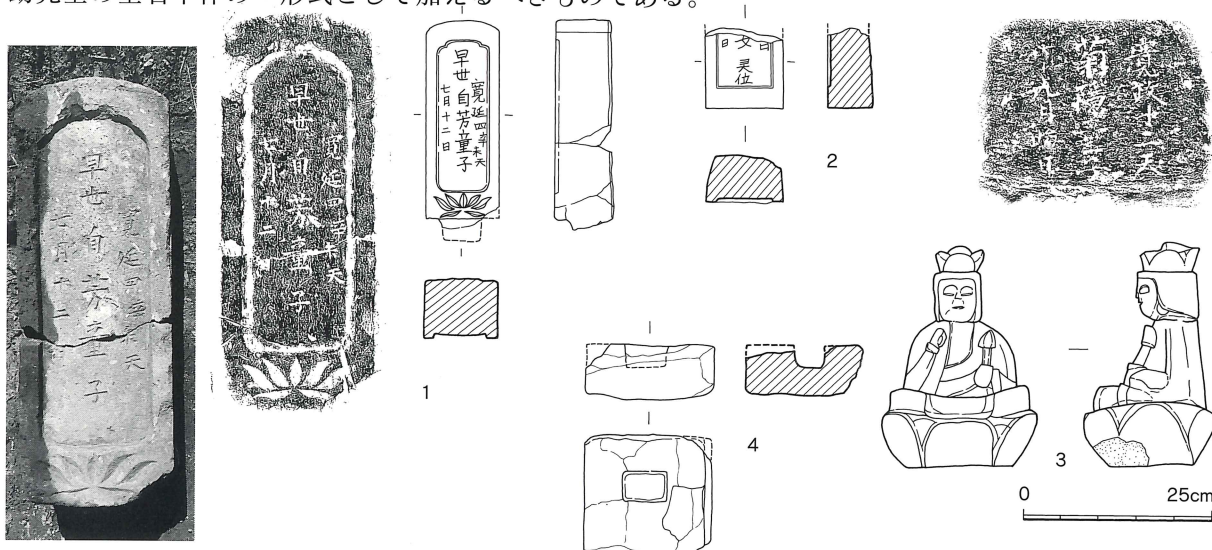
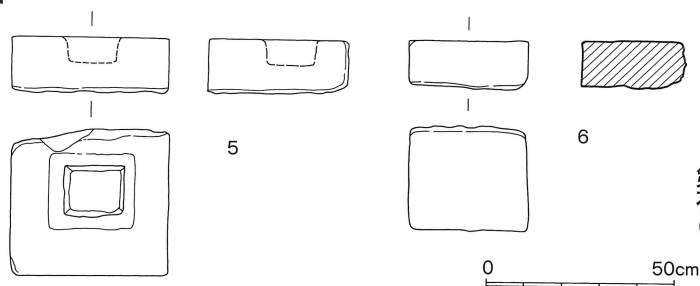


写真5 1号墓石



第6図 茨川原近世墓地の墓石 (1・2・4~6=1/20、3=1/10)
(拓本は1=1/10、3=1/5)

1号墓石 (第6図1、写真5)

凝灰岩製の墓石本体で、先端を欠いているが方形のほぞ突起が認められる。ほぞ突起をのぞく高さは53cm、幅は19cm、厚さは上端で14cm、下端で15cmである。頂部が浅い蒲鉾状の位牌形墓石で、正面に一段の花燈形の掘りくぼめがあり、横断面は浅い円弧状をなす。その下端は丸く仕上げている。掘りくぼめの下には、蓮華文が陰刻されている。この蓮華文は上5弁下2弁の組合せで、上を向く5つの花弁の先端を結ぶ線は円弧をなし、吉田寛氏が蓮華文の様式変化の新様式としたものにあたる(註)。正面と両側面はよく研磨され、チョウナの痕跡を残さない。蒲鉾状の上面はチョウナ痕が残り、背面は粗いノミ痕のままである。

正面の掘り窪めのなかに銘文が刻まれている。戒名および没年月日が正面のみに配置される一観面の配置である。銘文はいずれも薬研彫で中央に「早世自芳童子」と、その両側に「寛延四辛未天」「七月十二日」と分けて刻まれ、銘文の文字内面はことごとく墨入れされている。この銘文から1751年(寛延4年)7月12日に死亡した幼児男性の埋葬のために建てられた墓石であることが判明する。

註 吉田寛『中尾近世墓地』P82~83、1999 大分県教育委員会

2号墓石 (第6図2、写真6)

凝灰岩製の墓石本体の破片である。周辺の草むらに遺棄された状態で発見した。本体の下半部破片で、底面にほぞ突起を彫りだしていない。下端の幅は20.5cmで、厚さは12cmをはかり、幅は裏側に近くなるにつれて狭くなる台形状である。正面に一段の花燈形の掘り窪めがあり、その下端は鋭角に仕上げられている。正面はよく研磨され、チョウナの痕跡を残さない。両側面はチョウナ痕が残り、背面は粗いノミ痕のままである。



写真6 2号墓石

正面の掘り窪めのなかに銘文が刻まれている。戒名および没年月日が正面のみに配置される一観面の配置は1号墓石と同じである。銘文はいずれも薬研彫で中央に「●●●●女 ●位」と、その両側に「●●●●月」「●●●●日」と分けて刻まれている。銘文からは女性の埋葬のために建てられた墓石であることが判明するのみで、年齢・死亡年月日等は不明である。

しかし一観面の銘文配置をとること、花燈形の掘り窪めの下端が鋭角になること、横断面が台形になることなどの特徴は女狐近世墓地や中尾近世墓地の墓石の古い様相と合致し、おおよそ18世紀中ごろから後半の位牌形墓石の特徴と言えるであろう。

3号墓石 (第6図3、写真7)

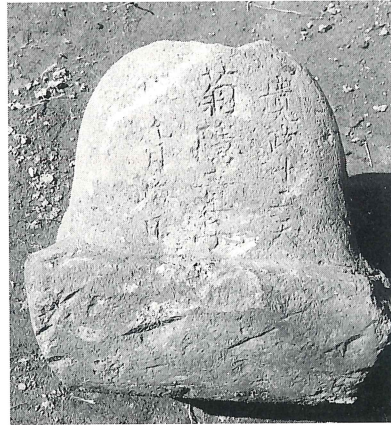
凝灰岩製の仏像丸彫型の墓石である。同じく周辺の草むらに遺棄された状態で発見した。底面にほぞ突起を彫りだしていないので、おそらく台石の上に置かれていたものと推定される。



写真7 3号墓石正面



側面



背面

下半に蓮華座が、上半に観音座像が丸彫りされている。左手に蓮のつぼみを持ち、右手は印を結び、前垂れをつけて胡坐をかく。頭部には冠が彫られている。全体に研磨がおよび製作痕跡を残さない。背面に浅い薬研彫で中央に「菊隠童子」、右に「寛政十二天」、左に「九月廿●日」と刻まれている。この銘文から西暦1800年に死亡した幼児男性の墓石であることが判明する。

丸彫の観音像が背面に銘文をもって墓石に転用されている例が報告されているかぎり県内では初めてである。

4号墓石 (第6図4、写真8)

凝灰岩製の台石で、かなり破損しているが、寸法と製作痕跡の観察は可能であった。中央奥によって長方形のほぞ穴が穿たれている。製作痕跡とほぞ穴の位置から正面と上面を推定することができる。正面と両側面および上面はノミあるいはチョウナにより平坦に調整された後、研磨が施されている。これに対し、背面と下面は粗い敲打のままで調整が行なわれていない。したがって図のようにおかれたものである。寸法は幅35cm奥行31cm、高さ14cm。下面は未調整であるが、比較的平坦に整えら



写真8 4号墓石

れており、墓石の台石はさらに下にもう一段おかれていた可能性もある。

5号墓石 (第6図5、写真9)

凝灰岩製の台石で、中央奥によって長方形のほぞ穴が穿たれている。製作痕跡とほぞ穴の位置から正面と上面を推定することができる。正面と両側面および上面はノミあるいはチョウナにより平坦に調整されているのに対し、背面と下面は粗いノミ痕のまま調整が行なわれていない。したがって図のようにおかれたものである。寸法は幅42cm、奥行39cm、高さ15cm。下面は未調整であるが、比較的平坦に整えられており、墓石の台石はさらに下にもう一段おかれていた可能性がある。

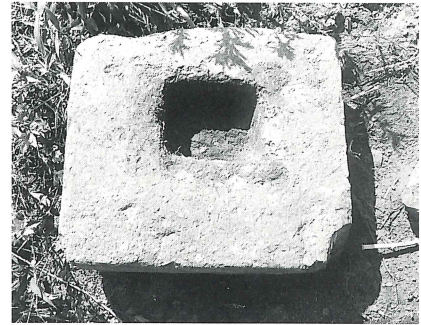


写真9 5号墓石

6号墓石 (第6図6、写真10・11)

凝灰岩製の台石で、ほぞ穴は穿たれていない。製作痕跡が明瞭なので、容易に正面と上面を推定することができる。正面と両側面および上面はノミあるいはチョウナにより平坦に調整されているのに対し、背面と下面は粗い敲打のまま調整が行なわれていない。したがって図のようにおかれたものと推定される。寸法は幅32cm、奥行27cm、高さ13cm。また下面が未調整の点から考えてこの墓石の台石は1段のみの配置であったと考えられる。



写真10 6号墓石

第2表 茨川原近世墓地墓石一覧表

No	種類	形式	石材	銘文位置配置	銘文	被葬者	没年西暦	寸法 (cm)	備考
1	墓石	位牌形	凝灰岩	正面・一観面	(右側) 寛延四辛未天 (中央) 早世自芳童子 (左側) 七月十二日	幼児男性	1751年	高さ 53 幅 19 厚さ 15	ほぞ突起あり
2	墓石	位牌形	凝灰岩	正面・一観面	(右側) ●月 (中央) ●●●女 霊位 (左側) ●日	成人女性?	不明	高さ (22) 幅 21 厚さ 12	ほぞ突起なし 上半欠失
3	墓石	仏像形	凝灰岩	背面・一観面	(右側) 寛延十二天 (中央) 菊隠童子 (左側) 九月廿日	幼児男性	1800年	高さ 30 幅 21 厚さ 17	ほぞ突起なし
No	種類	形式	石材	寸法 (cm)					
4	台石	ほぞ穴有	凝灰岩	幅35・奥行31・高さ14					
5	台石	ほぞ穴有	凝灰岩	幅42・奥行39・高さ15					
6	台石	ほぞ穴無	凝灰岩	幅32・奥行27・高さ13					

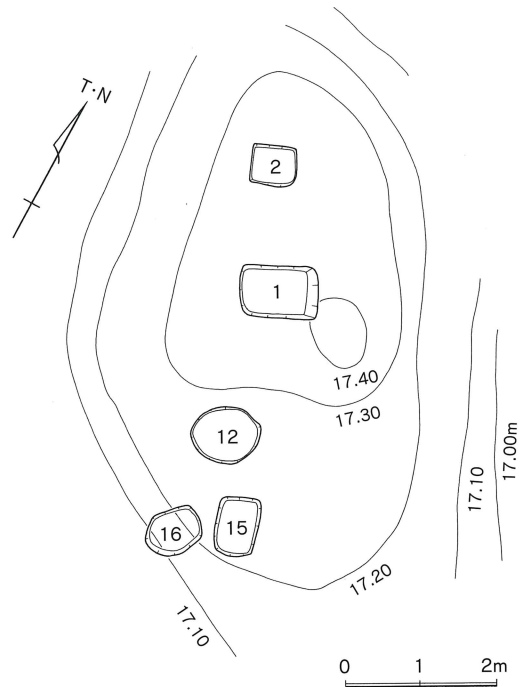
第6節 発掘調査の記録

1) 上面 (第1遺構面) 検出遺構 (第7図)

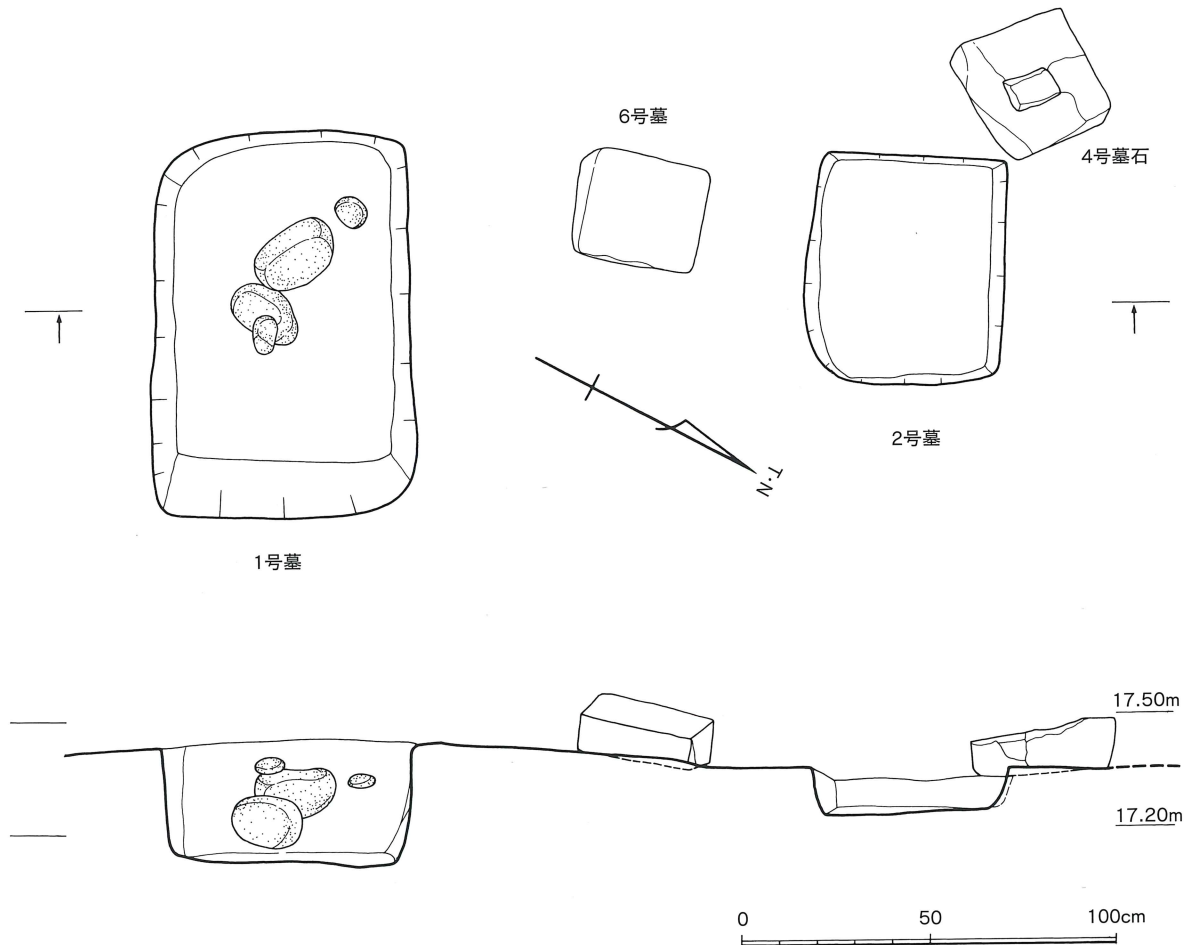
表土を剥いだ1層上面で大小さまざまな凹みを16箇所検出し、1号から16号の番号を与えたが、掘り下げた結果、墓坑または人為的な土坑と判断したのは、第7図に示した5基である。それ以外の3～11・13・14号墓はいずれも表土除去後第1遺構面で検出した不定形の土坑群であるが、掘り下げの結果、墓坑とは認定できなかった遺構である。以下に当初の番号を生かして記述する。

1号墓 (第8図・写真11)

墓地の立地する高まりの中央に近い、最も高い地点で検出された長方形の浅い土坑で、長軸は東西方向に近い (方位角62度)。検出面で長軸長103cm、短軸長68cmをはかり、深さは32cmのきれいな箱形であった。内部には腐植土が充満し、中央に底面からやや浮いた状態で大小の円礫が出土した。それ以外に遺物は検出されなかった。



第7図 茨川原近世墓地上面墓坑配置図 (1/100)



第8図 1号墓・2号墓 (1/20)

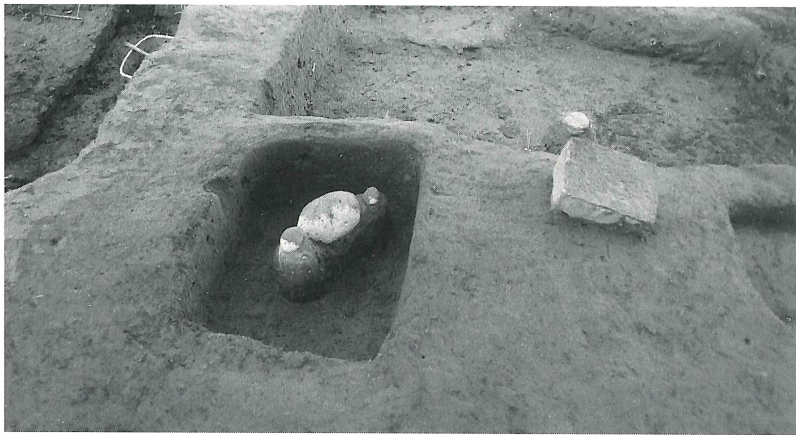


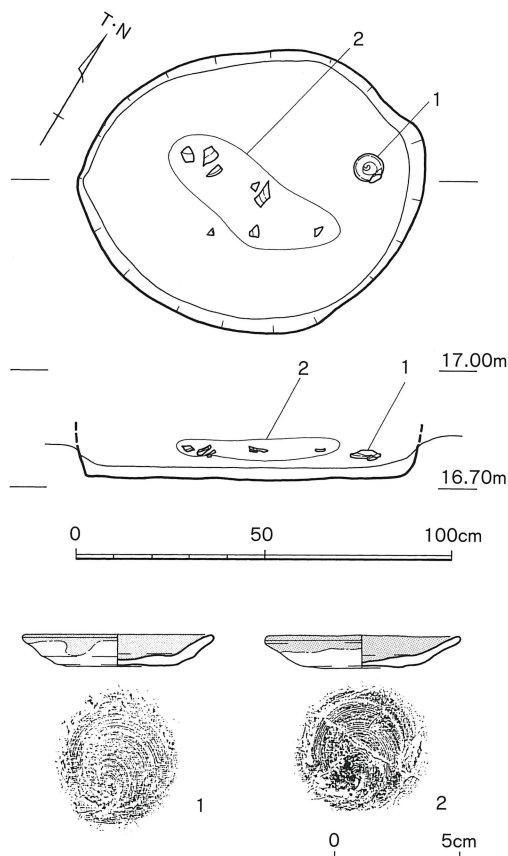
写真11 1号墓と6号墓石

墓坑と判断するにはあまりにも浅いのでややちゅうちょするが、内部に棺上に被せたと推定される円礫が落下していることと、箱形の木棺を納めたと思われる土坑の形態からみて、墓坑と判断しておきたい。墓坑だとすれば第30図の墓坑規模相関図から判断して、成人墓であったと見られる。なお第4図の調査前の墓石配置図からみてK号墓石本

体と対応するもので、そのK号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定される。

2号墓 (第8図)

1号墓の北側に並行するように設けられた長方形箱形の浅い土坑である。長軸は東西方向に近い(方位角65度)。検出面で長軸長60cm、短軸長53cmをはかり、深さは11cmときわめて浅い。内部には腐植土が充満していたが副葬品等の遺物は出土しなかった。墓坑とするにはあまりにも浅く、対応する墓石も存在しないようなのでややちゅうちょするが、すぐそばに4号ないし6号墓石の台石が放置されていることと、箱形の木棺を納めたと思われる土坑の形態からみて、墓坑と判断しておきたい。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、幼児墓であったと見られる。なお第4図の調査前の墓石配置図には対応する墓石は存在しない。



第9図 12号墓 (遺構=1/20、遺物=1/3)

12号墓 (第9図・写真12、図版1)

1号墓の南側で検出されたやや不整形円形の浅い土坑である。底面は平坦で、検出面での長軸長91cm、短軸長75cmをはかり、深さは10cmときわめて浅い。その規模と形状から推定して早桶を利用し、墓坑の規模を比較した第30図から判断して成人墓であったと考えられる。底面からやや浮いて、2個体の土師質小皿が検出された。1の施釉土師質土器の小皿は墓坑底の東隅に完形のまま伏せておかれた状態で出土したのに対し、2の同じ施釉土師質土器小皿は墓



写真12 12号墓 (北から)

坑中央にばらばらに割れて、破片が散在していた。前者の1はその出土位置から棺外に副葬された可能性が高く、後者の2は棺内または棺上に破砕した上で供献されたものであろうか。なお第4図の調査前の墓石配置図には対応する墓石は存在しない。1・2(図版1)ともに、同一の製作技法で作られた施釉土師質土器小皿で、詳細は第4表に譲るが、ともに赤色顔料を塗布したうえに、その色をさらに際立たせるために透明に近い柿釉が塗られている。女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のC類にあたり、19世紀に盛行する土師質小皿の一型式である。

15号墓

(第10図、写真13)

12号墓の南側の斜面で16号墓と並ぶように検出された墓坑であるが、第4図の調査前の墓石配置図には対応する墓石は存在しない。

底面は平坦で、検出面での長軸長80cm、短軸長55cmをはかり、深さは15cmときわめて浅い長方形の墓坑である。その規模と形状から推定して箱棺を利用し、墓坑の規模を比較した第30図から判断して幼児墓であったと考え

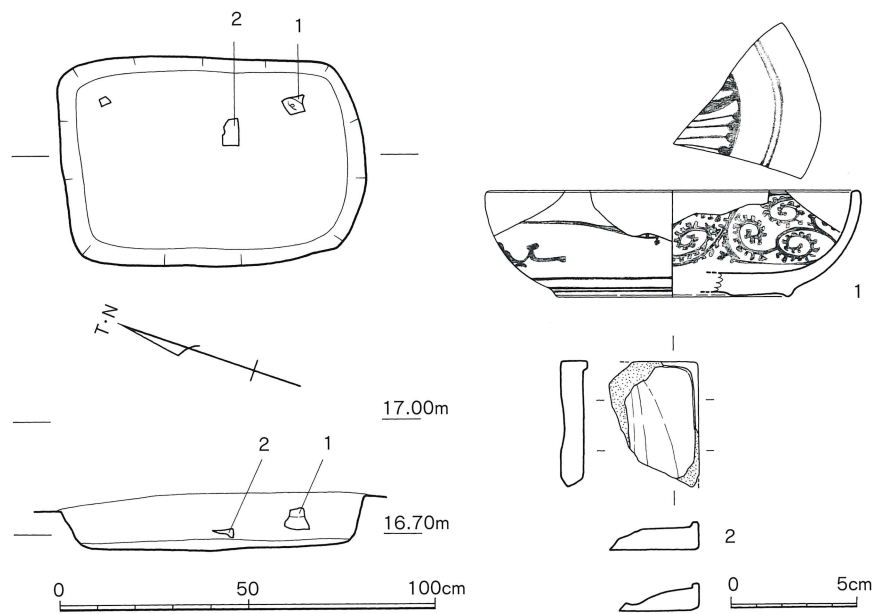


写真13 15号墓(北から)

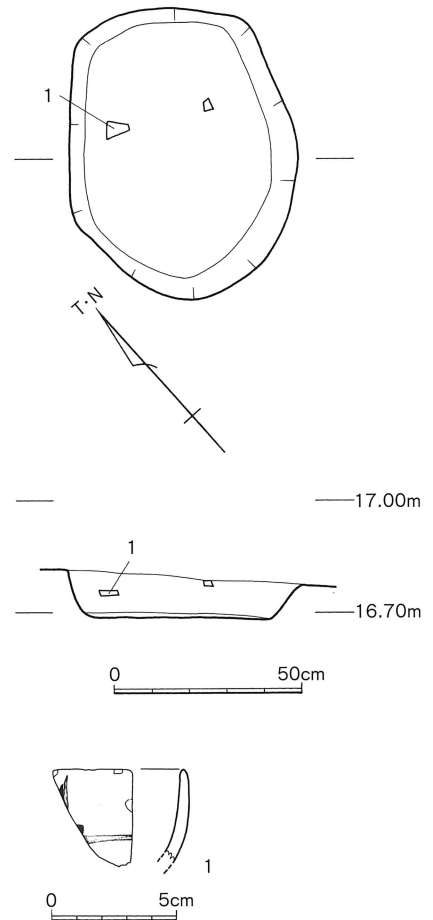
られる。坑内からは陶器破片・染付碗破片・碗の破片が上下してばらばらに出土した。副葬品とは考えられず埋葬時の混入品とみられる。そのうち1は肥前産染付皿で、復元口径14.8cm・器高4.2cm・復元底径9.3cmである。2は緑灰色の頁岩を利用した小型の硯である(図版1)。1の皿が18世紀後半の製品であるので、埋葬もその時期以前にはさかのぼらない。

16号墓 (第11図、写真14)

同じく12号墓の南側の斜面で15号墓と並ぶように検出された墓



第10図 15号墓(遺構=1/20、遺物=1/3)



第11図 16号墓(遺構=1/20、遺物=1/3)

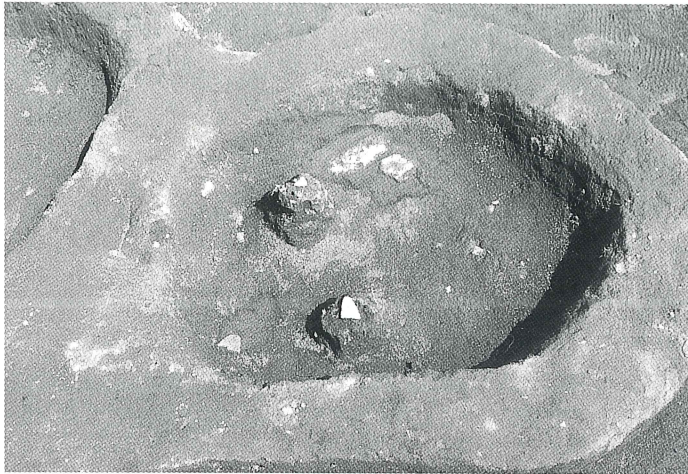


写真14 16号墓（西から）

坑であるが、第4図の調査前の墓石配置図には対応する墓石は存在しない。底面は平坦で、検出面での長軸長77cm、短軸長61cmをはかり、深さは14cmときわめて浅い不整円形の墓坑である。その規模と形状から推定して早桶を利用した墓であったと考えられる。墓坑の規模を比較した第30図からみて成人墓か幼児墓かの判定は難しい。坑内からは陶器破片と染付碗破片が出土した。副葬品とは考えられず埋葬時の混入品



写真15 包含層南半出土状態（北から）



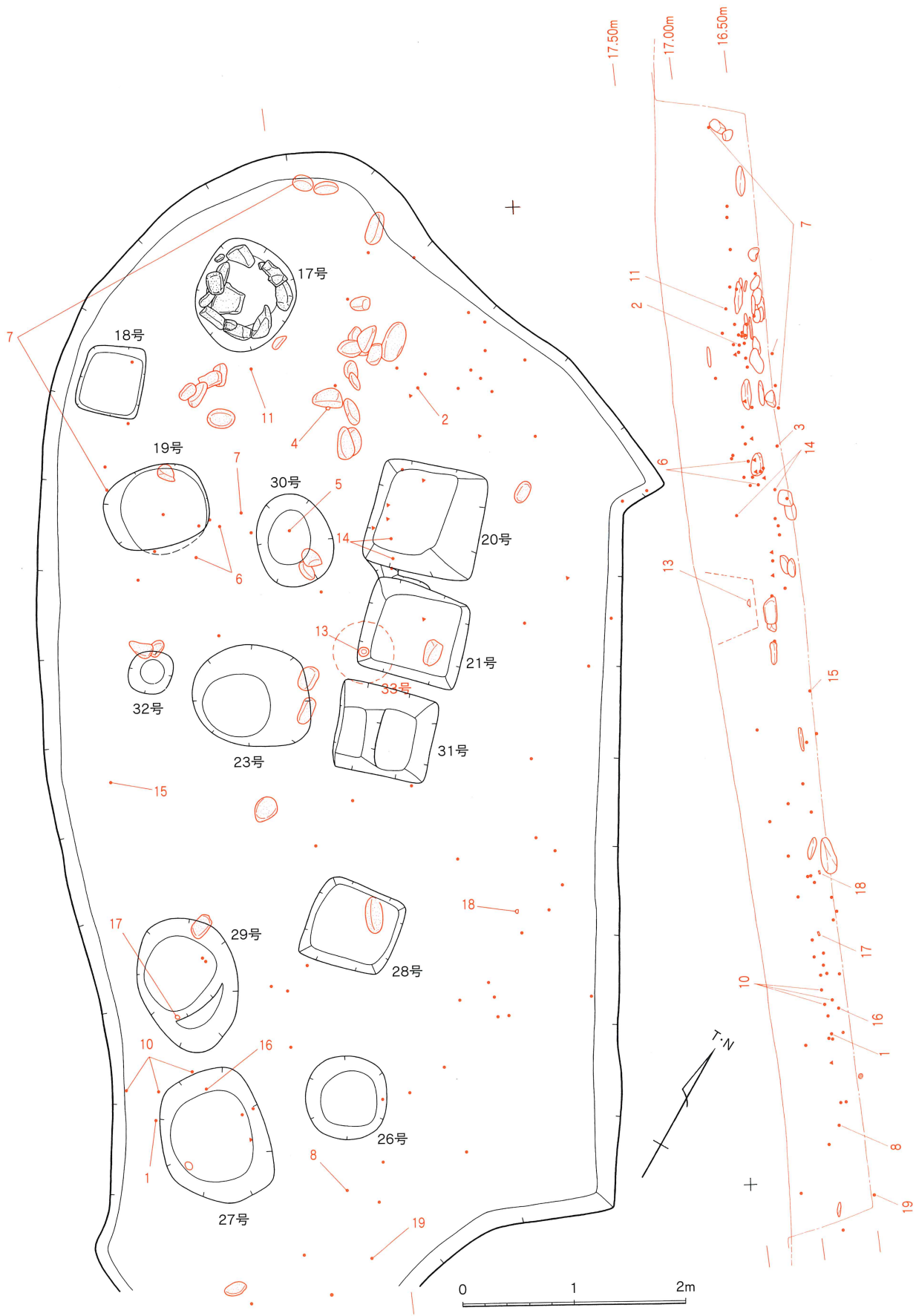
写真16 包含層北半出土状態（東から）

とみられる。そのうち1は肥前産染付碗で、18世紀後半の製品である。したがって埋葬もその時期以前にはさかのぼらない。

2) 包含層

(第12・13・14図、写真15・16、図版1)

表土直下の上面の遺構群を調査した時点で、墓坑の壁等から近世陶磁器の破片が顔をだし、なんらかの人為的に堆積した包含層の存在が予想され、遺物の出土しなくなる高さまで掘り下げをおこなった。その結果が第3図で示した層序である。現表土から40cmほどは暗褐色の砂層（I層）で、I層の下には、黄砂混じり暗褐色砂層が堆積し、その下はふたたびやや硬くなった黄砂混じり暗黄褐色砂層のIII層が堆積している。このうち特に下部のII・III層から多くの近世遺

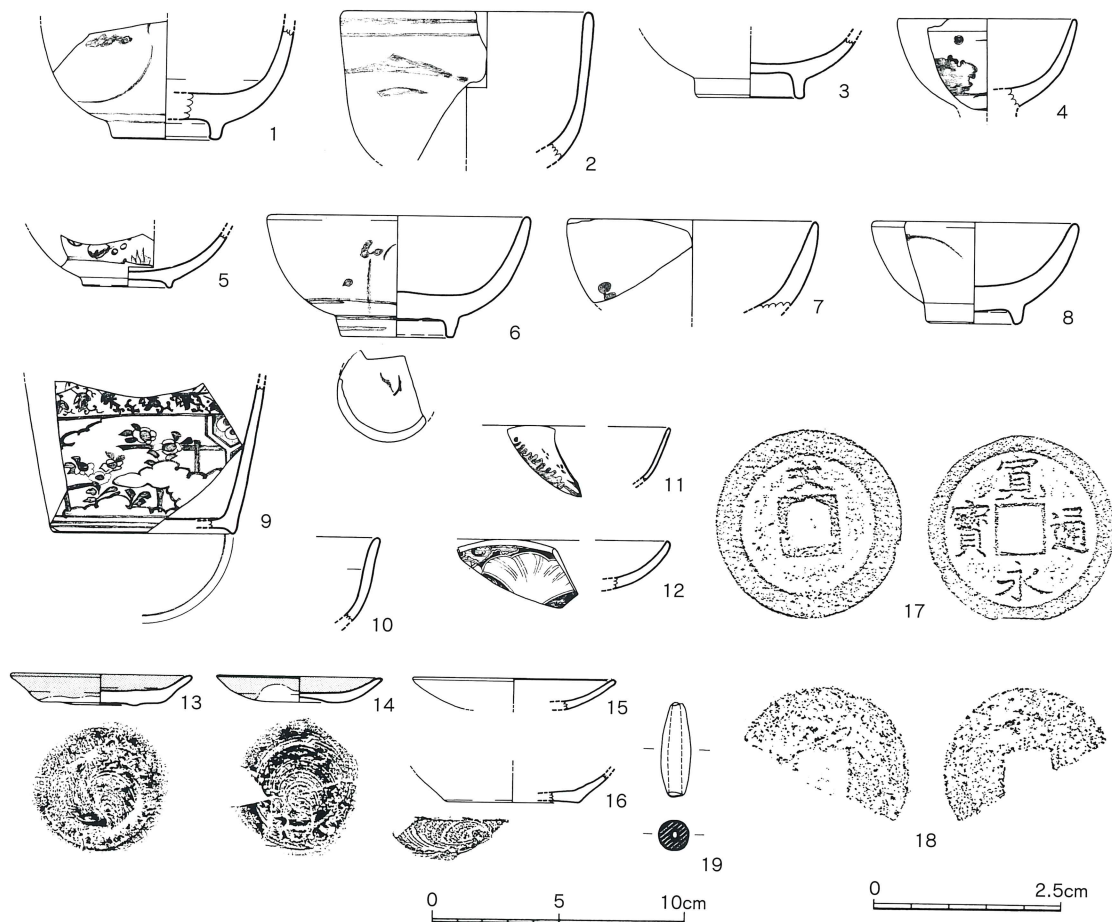


第12図 茨川原近世墓地包含層遺物出土状態 (1/50)

物と河原石である円礫が出土した。第12図のように下面検出の墓坑と重ねてみると、かなりの遺物は下面検出の墓坑の埋土内に混入していたと推定される。また第13図13の土師質土器小皿は、完形のまま伏せた状態で検出され、高さも包含層の中位にあたるので、おそらく技術的に検出できなかった浅い墓坑が存在したと推定される。この推定される墓坑を33号墓と仮定した。このほかに包含層出土遺物のうち、5は30号墓の埋土中にあたる位置から検出されたことになる。以下13が19号墓、14が18号墓、16が27号墓、17が29号墓の位置から出土した。

さて包含層出土近世遺物を製作時期順に並べたものが第13図である。1と2は18世紀前半製作の肥前産陶胎染付碗の破片で、ともに全面に貫入がはいる。1は復元底径4.3cm、2は復元口径10.0cm。3は18世紀前半代製作の肥前現川系の陶器刷毛目碗で、底径は4.3cm。4は同じく18世紀前半代製作の肥前産染付仏飯器で復元口径は7.2cmで、コンニャク印判による文様である。5は18世紀後半製作の肥前染付碗の底部片で、底径3.6cm。6は完形に接合した18世紀後半製作の肥前染付碗で、いわゆる「くらわんか」碗である。底部外面に大明年製くずれの銘が入り、口径10.4cm、器高4.8cm、底径4.4cm。7も同じく18世紀後半製作の肥前染付碗で、復元口径は10.0cm。8も18世紀後半製作の肥前染付小碗で、口径8.2cm、器高4.0cm、底径3.8cm。9は18世紀後半製作の肥前染付小そば猪口で、復元底径は7.1cm。10は1840～1880年に製作された福岡産高取系の陶器碗口縁片である。11は同じく1840～1880年に製作された瀬戸美濃産薄手酒杯の破片である。12は1910年代大正年間製作の瀬戸美濃産と推定される銅版転写の磁器皿である。

土師質土器小皿。13は19号墓と重なる位置の包含層中位で完形品のまま伏せた状態で検出された

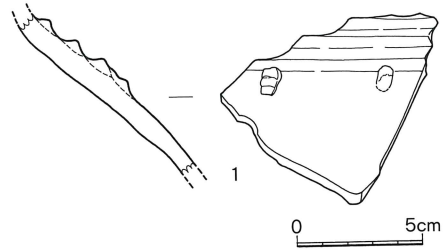


第13図 茨川原近世墓地包含層出土遺物 (1~16・19=1/3、17・18=1/1)

(第12図) 施釉土師質土器小皿である。詳細は第4表に譲るが、女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のC類にあたり、19世紀に盛行する土師質小皿の一形式である。この土器の出土状態から33号墓の存在が考えられた。14も施釉土師質土器小皿である。女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のC類にあたる。15は土師質土器小皿の口縁片で、16は同じく底部片で、女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のB-I類またはB-II類にあたりにあたり、18世紀後半の製品である。

銭貨と土錘。17は1668年初鑄の新寛永通宝文銭で径2.4 cm、孔は一辺約5 mmの完形である。重さ3.2 g。18は銭種不明の半折した銅銭である。19は小型の管状土錘で、重さ5.1 g。

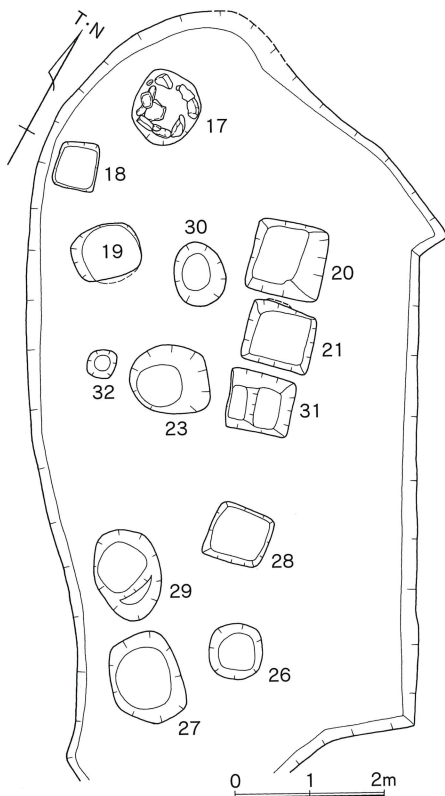
第14図1は以上の近世の包含層中に残留していた弥生時代後期の安国寺式土器の壺の破片で、肩部に多条の三角突帯を巡らしたうえに、勾玉状の浮文を張りつけている。



第14図 包含層残留遺物 (1/3)

3) 下面 (第2遺構面) 検出遺構 (第15図、写真17・18)

包含層を掘り下げて遺物の出土がなくなる地点で遺構検出を行ない、発見した墓坑が以下の下面検出の墓坑群である。表土上にかつて存在していた墓石とその位置が対応する墓坑がおおいので、墓坑は、検出面から掘り込まれたものではなく、その多くは上面あるいはそれに近い位置から掘り込まれていたものと推定される。



第15図 茨川原近世墓地下面墓坑配置図 (1/100)

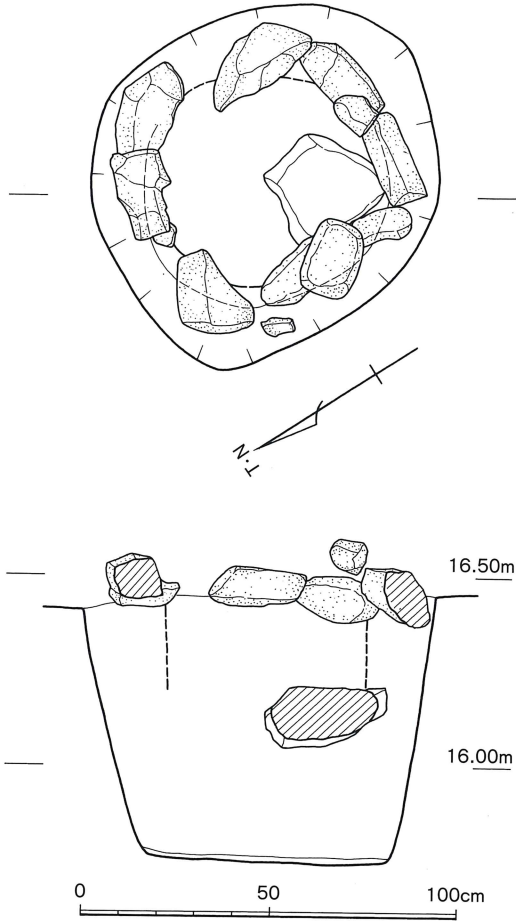


写真17 下面の墓坑 (南から)



写真18 下面の墓坑 (東から)

17号墓 (第16図、写真19)



第16図 17号墓 (1/20)

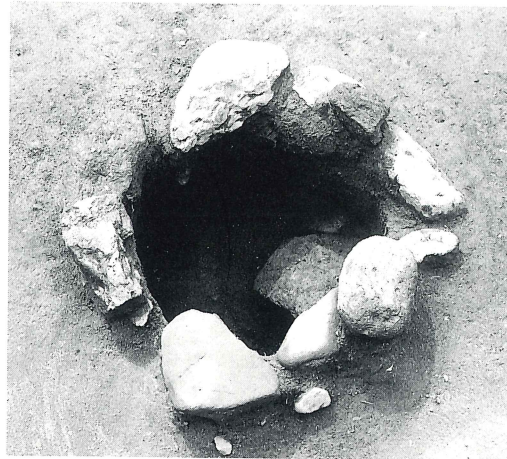
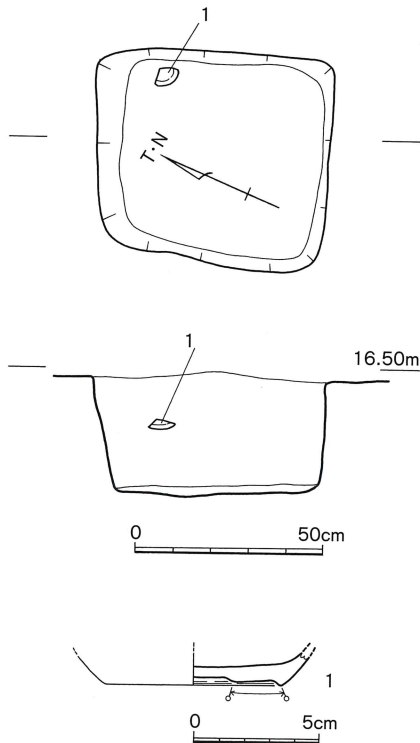


写真19 17号墓

調査範囲のもっとも北で検出した円形土坑である。なお第4図の調査前の墓石配置図からみてH号墓石と対応するものと推定される。そのH号墓石は第5図の相関表から板碑形または位牌形墓石であったと推定され、台石は一段である。底面は平坦で、検出面での長軸長98cm、短軸長85cmをはかり、底径は61~65cmで、深さは70cmの円形の墓坑である。その規模と形状から推定して早桶を利用し、鉄釘が出土しないこともその傍証となろう。墓坑の規模を比較した第30図から判断して成人墓であったと考えられる。副葬品等の出土遺物は皆無であったが、棺上に置いたと推定される人頭大の角礫が1点棺内部と推定される位置で検出された。また早桶の上部の周囲に配置したと推定される角礫群が第16図のように

出土している。



第17図 18号墓 (遺構=1/20、遺物=1/3)



写真20 18号墓 (西から)

18号墓

(第17図、写真20)

17号墓の南側墓域の西端で検出された方形墓坑で、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面での長軸長63cm、短軸長57cm

をはかり、深さは33cmである。墓坑内からは釘が出土せず、また墓坑形態が方形であることから、使用された棺は早桶または組合せ式の方形棺であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、幼児墓であったと見られる。台石の有無は不明である。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてG号墓石と対応するものと推定される。G号墓石は幼児用の舟形光背をもち、おそらく地蔵を彫りだした仏像形の墓石と推定される。

出土遺物は墓坑隅のかなり浮いた位置から1の磁器香炉の底部破片が出土したのみである。復元底径は7.0cm。底部は蛇の目釉剥ぎ高台で、内面には細かい砂の付着が認められる18世紀代の製品である。この磁器片は副葬品ではなく、墓坑埋土中に混入したものと考えられる。したがって明確な副葬品は存在しなかったと推定される。

出土遺物と推定される墓石の形式から18世紀後半から19世紀代の墓と推定される。

19号墓 (第18図、写真21)

17・18号墓の南側で検出された円形の土坑で、検出面では長円形、底面ではほぼ正円形をなす。検出面での長軸長92cm、短軸長72cmをはかり、底径は74~75cm、深さは92cmである。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。墓坑内からは釘が出土せず、また墓坑形態が円形であることから、使用された棺は早桶であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてF号墓石と対応するものと推定される。F号墓石は第5図の相関表から位牌形墓石であったと推定され、台石は一段である。

墓坑底部北側からやや浮いて、1の土師質土器小皿が二つに割れて検出され、同じ高さに円礫の破片が見つかった。小皿は副葬品というよりも納棺直後に行なわれた葬礼の一環として割られて棺上に廃棄された可能性が高い。



写真21 19号墓 (南から)

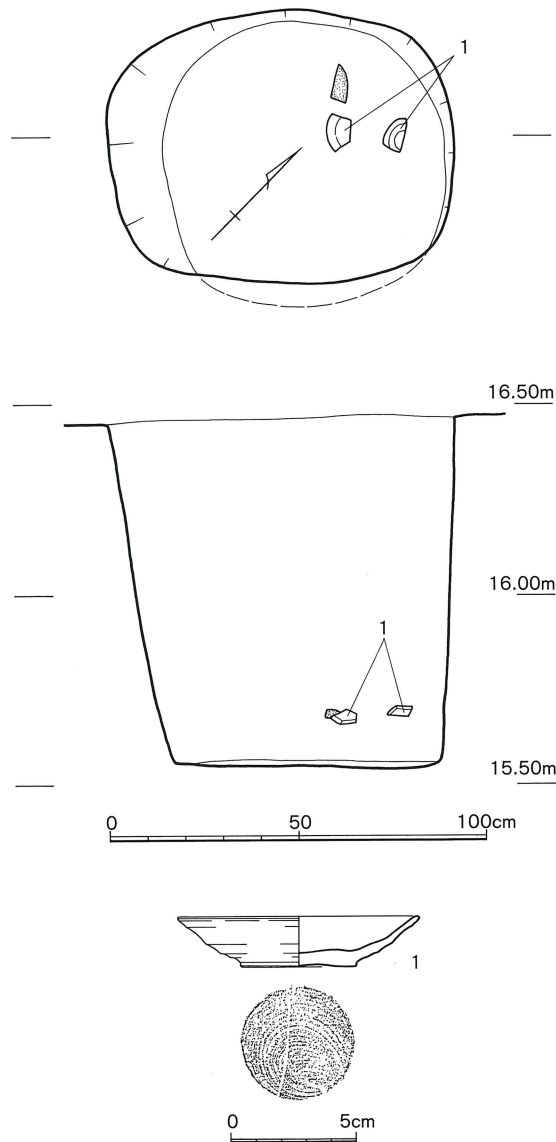
1は土師質土器小皿で口縁部のかなり

を欠くもののほぼ完形に復元できる(図版1)。詳細は第4表に譲るが女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のB-1類にあたり、18世紀中葉の製品である。

土師質土器小皿の型式と位牌形墓石である可能性の高い点から18世紀中葉の墓と考えられる。

20号墓 (第19図、写真22)

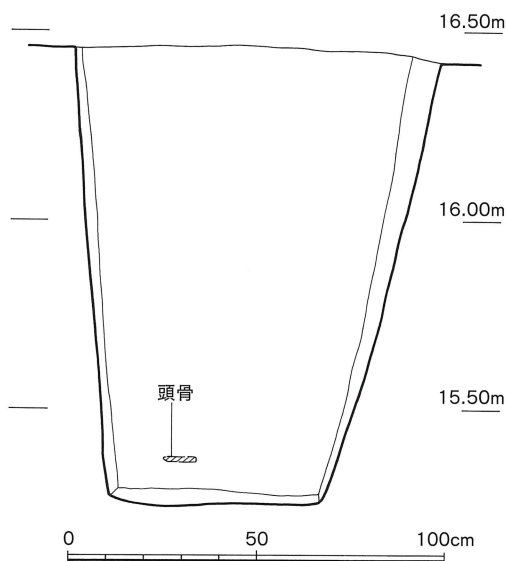
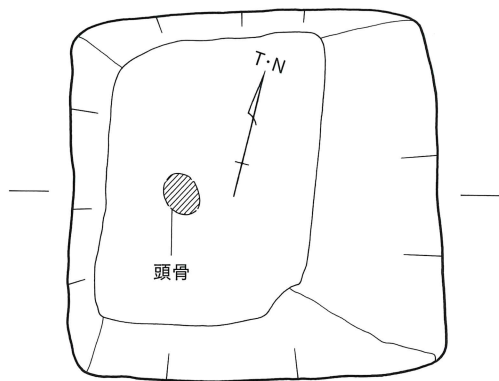
20・21・31・28号墓の1列に並ぶ四基の方形墓坑の一番北側に位置し、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面での98×97cmをはかり、底面では76×56cm、深さは120cmである。墓坑内からは釘が出土せず、また墓坑形態が方形であることから、使用された棺は早桶または組合せ式の方



第18図 19号墓 (遺構=1/20、遺物=1/3)



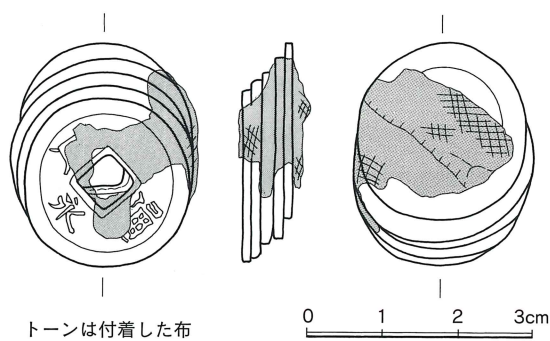
写真22 20号墓



第19図 20号墓 (1/20)

21号墓 (第20・21図、写真23)

20・21・31・28号墓の1列に並ぶ四基の方形墓坑の北から二番目に位置し、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面での91×82cmをはかり、底面では70×65cm、深さは110cmである。墓坑内からは釘が出土せず、また墓坑形態が方形であることから、使用された棺は早桶または組合せ式の方形棺であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。



第21図 21号墓出土銭貨 (1/1)

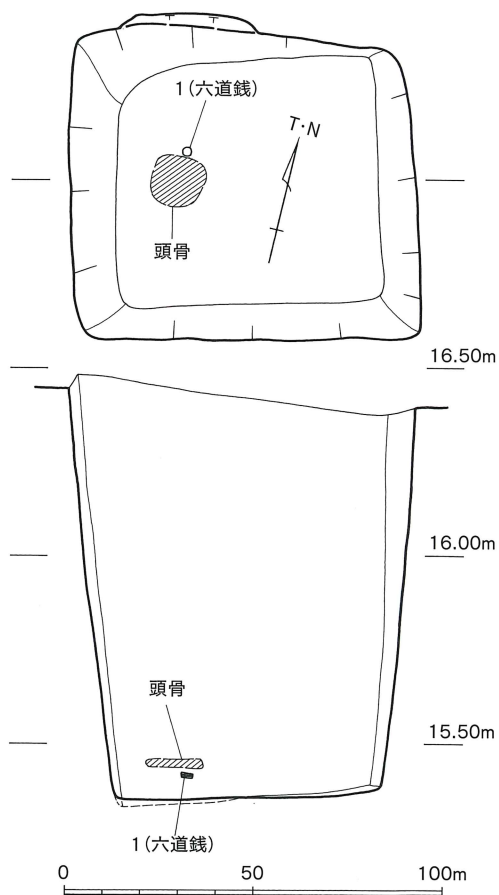
形棺であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてS号墓石と対応するものと推定される。S号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

中央西寄りにやや浮いて不朽した頭骨の残片と歯を検出したが、副葬品等の遺物は皆無であった。



写真23 21号墓 (東から)



第20図 21号墓 (1/20)

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてT号墓石と対応するものと推定される。T号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

中央西寄りに底面から10cmほど浮いて腐朽した頭骨片を検出し、さらにそのそばのわずかに下で五枚一組の錆着した六道銭を発見した(図版1)。この埋葬に伴う副葬品と考えてよい。1はその5枚の銅銭が錆着した5枚一組の六道銭である。緑青で保存された布の痕跡が残っており、5枚の銅銭で完結していたことがわかる。外側の1枚は新寛永通宝である。



写真24 23号墓 (北から)

23号墓 (第22図、写真24)

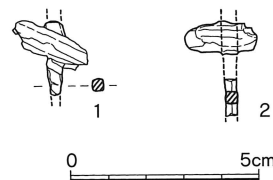
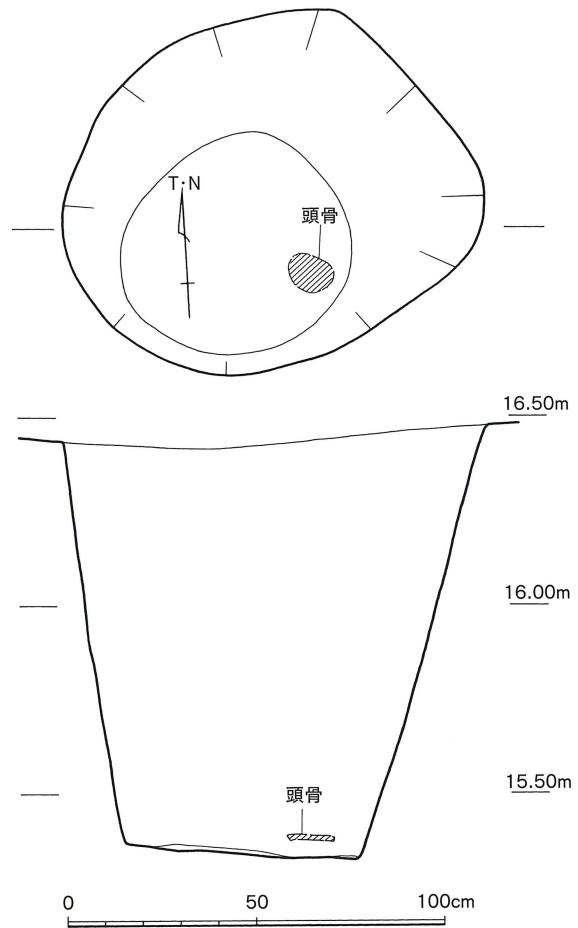
31号の西側背後に位置する円形の土坑で、検出面では長円形、底面ではほぼ正円形をなす。検出面での長軸長112cm、短軸長95cmをはかり、底径は61~56cm、深さは110cmである。壁はやや傾くが底面は平坦である。墓坑内からは木目に直交して打ち込まれた釘が二点出土し、また墓坑形態が円形であることから、使用された棺は早桶であると推定され、蓋は釘で固定されたものと考えられる。底部西寄りで腐朽した頭骨片が出土している。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてO号墓石と対応するものと推定される。O号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

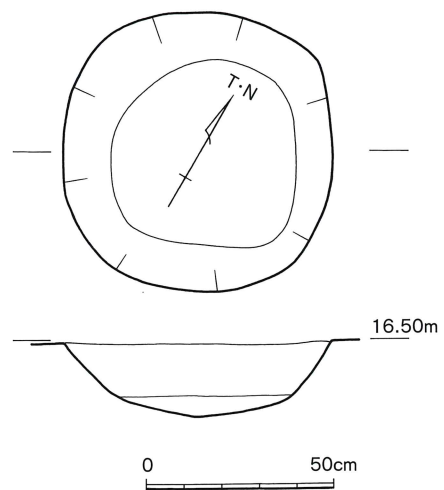
1は一辺約3mm残長18mmの角釘残片で、木質が釘の軸に交差するように錆着している。2も同様の一辺2~3mmの角釘残片で木質が釘の軸に直交して錆着している。いずれも木棺材の結合に用いられたものである。

26号墓 (第23図)

28号墓の南に位置する小型円形の土坑で、底径は71~70cm、深さは20cmであるが、底面は皿状で浅く墓坑ではない可能性もある。なお第4図の調査前の墓石配置図には対応する墓石



第22図 23号墓 (遺構=1/20、遺物=1/2)



第23図 26号墓 (1/20)

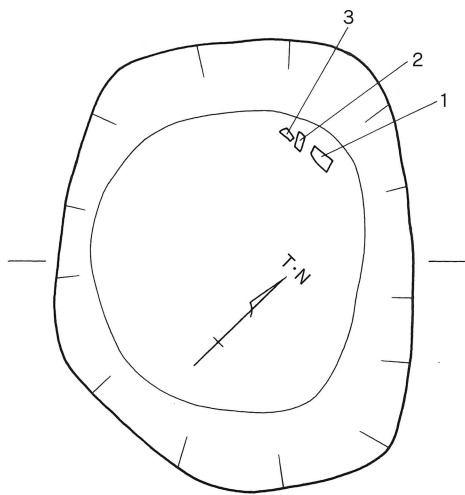
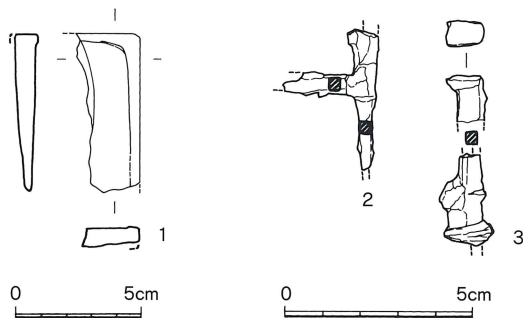
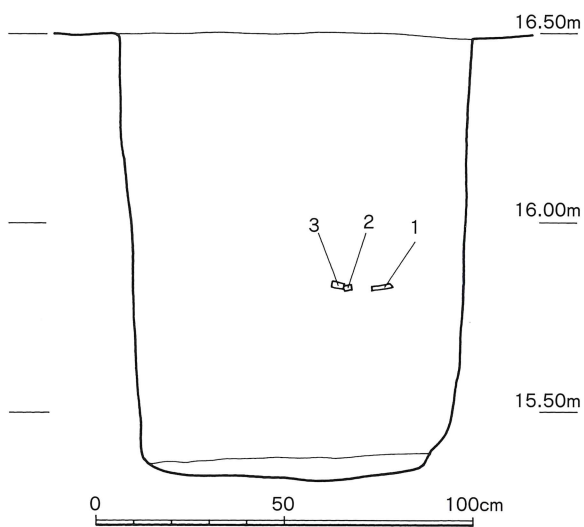


写真25 27号墓 (南から)

は存在しない。いま仮に墓坑と仮定した場合、墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。副葬品等の出土遺物は皆無であった。

27号墓 (第24図、写真25)

墓域最南端で検出された円形の土坑で、検出面では長円形、底面ではほぼ正円形をなす。検出面での長軸長119cm、短軸長95cmをはかり、底径は80~73cm、深さは118cmである。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。墓坑形態が円形であることから、使用された棺は早桶であると推定され、墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。しかし出土した2の鉄釘は二本の釘が交差して錆着しており、方形棺の結合に使用されたものと考えられる。この点でこの27号墓で使用された棺を早桶とすることはちゅうちょするが、鉄釘等の出土位置をみると墓坑内中位の北隅に1の硯片、3の鉄釘等とともにまともって検出されており、埋葬の際に意図せず流入したものとも考えられるので、早桶の可能性は残されている。



第24図 27号墓 (遺構=1/20、1=1/3、2・3=1/2)

C号墓石と対応するものと推定される。C号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

出土遺物。1は輝緑凝灰岩製の小型の硯の破片である(図版1)。2は2本の角釘が交差して錆着したものである。いずれも一辺3mmの釘である。3も角釘でつぶれた打撃面が残り、ところどころに直交する木質が残っている。

28号墓 (第25図、写真26)

20・21・31・28号墓の1列に並ぶ四基の方形墓坑の最南端に、ほかの三基とはやや離れて位置す

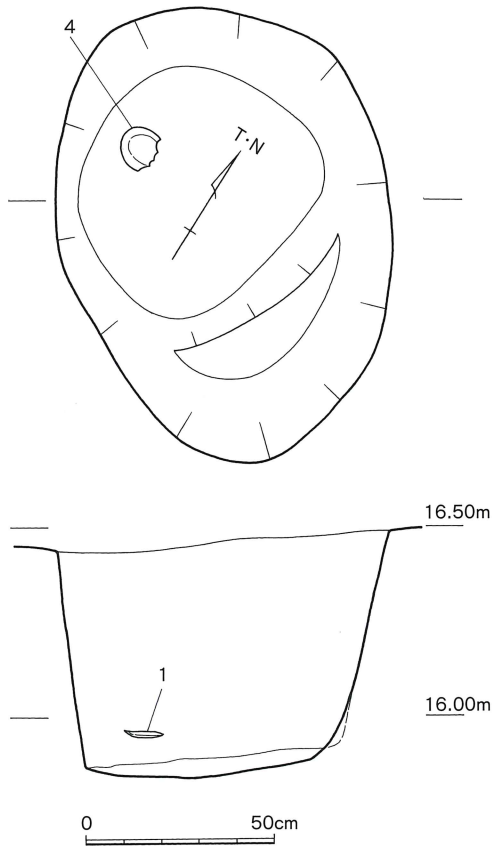
なお第4図の調査前の墓石配置図からみて

る。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面で81×77cmをはかり、底面では70×60cm、深さは40cmである。墓坑内からは釘が出土せ

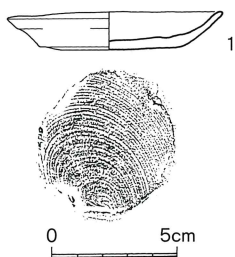


写真26 28号墓

ず、また墓坑形態が方形であることから、使用された棺は早桶または組合せ式の方形棺であると推定される。



第26図 29号墓 (遺構=1/20、遺物=1/3)



墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてV号墓石と対応するものと推定される。V号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

墓坑内からは保存状態の良い人骨がまとまって出土し、その傍らから樹脂製のボタンが1点出土した。この点から28号墓は現代墓と考えてよく、茨川原墓地の検出された墓のなかでは最も新しい埋葬と推定される。

29号墓 (第26図、写真27)

27号墓の北隣で検出された円形の土坑で、検出面で

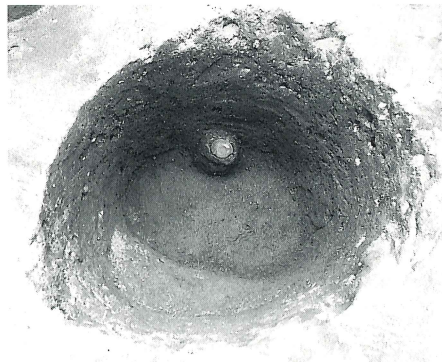
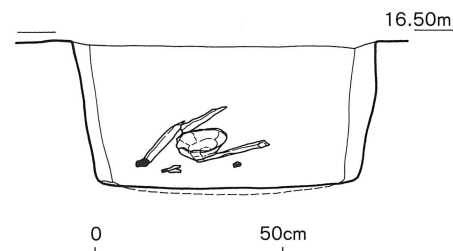
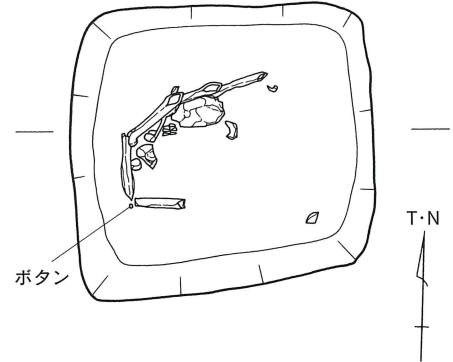
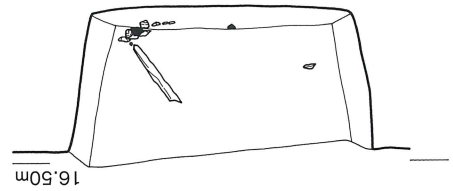
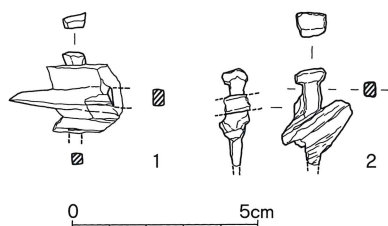
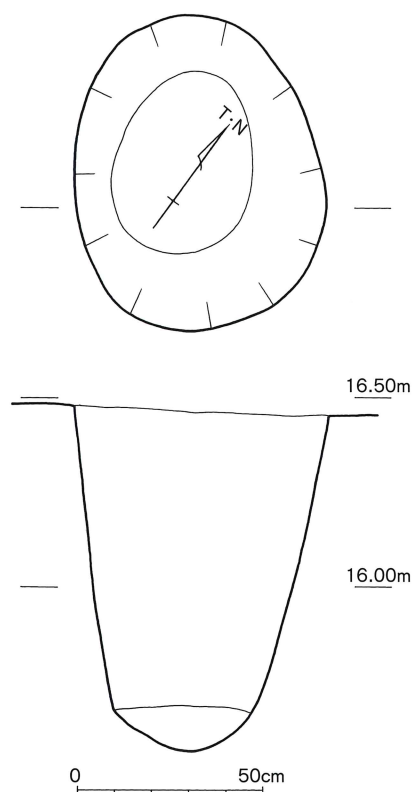


写真27 29号墓 (東から)

は長円形、底面ではほぼ円形をなす。検出面での長軸長121cm、短軸長90cmをはかり、底径は61~67cm、深さは30cmである。壁は途中に一ヶ



第25図 28号墓 (1/20)



第27図 30号墓 (遺構=1/20、遺物=1/2) 深さは90cmである。壁はほぼ垂直だが、底面は皿状である。墓坑形態が円形であることから、使用された棺は早桶であるとも考えられるが、他方出土した二組の鉄釘はいずれも2本の釘が交差して錆着しており方形棺の結合に用いられたと考えられる。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、幼児墓であったと見られることから、小型の方形棺を円形墓坑に納めたものと推定される。なお第4図の調査前の墓石配置図からみてM号墓石と対応するものと推定される。M号墓石は第5図の相関表から方柱形墓石であったと推定され、台石は三段である。幼児墓の墓石とは考えられない点が不審であり、位置の対応関係がまちがっているかもしれない。

埋土中から出土した二組の鉄釘については、正確な出土位置を特定できなかった。1と2はともに二本の角釘が交差して錆着したものである。いずれも先端で

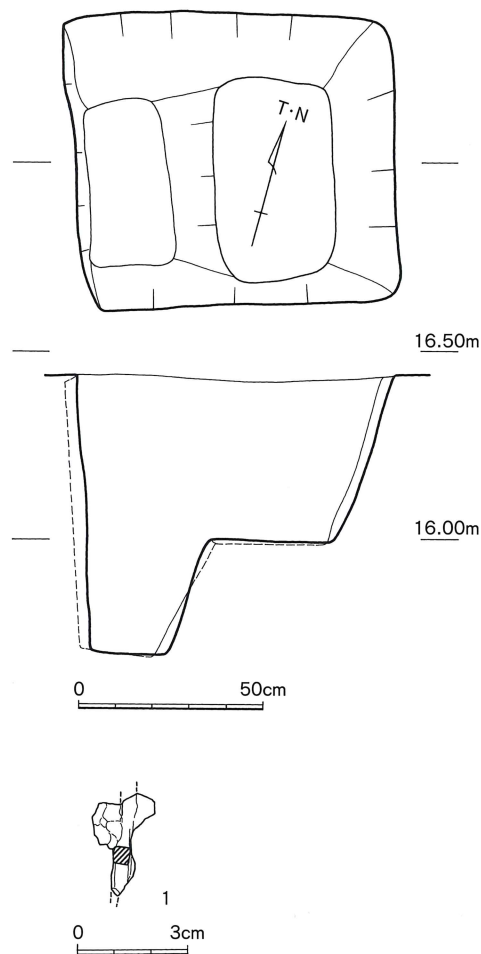
所段が付くもののほぼ垂直で、底面は平坦である。墓坑形態が円形であることから、使用された棺は早桶であると推定され、墓坑の規模を比較した第30図から判断して、成人墓であったと見られる。なお第4図の調査前の墓石配置図からみてD号墓石と対応するものと推定される。D号墓石は第5図の相関表から位牌形または方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

底部西隅にやや浮いて、口縁の一部をおそらく打ち欠いたと思われる土師質土器小皿1が、正位で出土した。その位置からみて棺内に置かれた副葬品である可能性が高い。1は土師質土器小皿で口縁部の一部を欠くもののほぼ完形に復元できる(図版1)。詳細は第4表に譲るが女狐近世墓地の土師質土器小皿分類のB-2類にあたり、18世紀後半から19世紀初頭の製品である。

この出土土器からみて29号墓は18世紀後半代の墓であったと思われる。

30号墓 (第27図)

20・21号墓の西側背後で検出された円形の土坑で、検出面・底面ともに長円形をなす。検出面での長軸長83cm、短軸長66cmをはかり、底径は長軸長49cm、短軸長38cm、

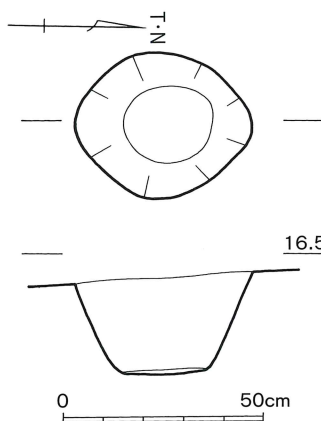


第28図 31号墓 (遺構=1/20、遺物=1/3)

つぶれた打撃面が残り、ところどころに直交する木質が残っている。十字形に交差した釘の存在は、方形棺が使用された証拠となろう。

31号墓 (第28図)

20・21・31・28号墓の1列に並ぶ四基の方形墓坑の北から三番目に位置する。壁はほぼ垂直で底面は平坦である。第28図では二段掘り風に深い部分があるが、この部分は掘りすぎたもので、高い位置の平坦面が坑底である。その復元で計測すると検出面での86×78cmをはかり、底面は一辺53cm、深さは43cmである。墓坑内からは鉄釘が1点出土し、また墓坑形態が方形であることから、使用された棺は組合せ式の方形棺であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、幼児墓であったと見られる。



なお第4図の調査前の墓石配置図からみてU号墓石と対応するものと推定される。U号墓石は第5図の相関表から方柱形墓石であったと推定され、台石は二段である。

墓坑埋土中からは鉄釘一点の他、染付小杯の小片などが出土したが副葬品は出土しなかった。1は一辺約4.5mm残長27mmの角釘残片で、やや大型の釘である。

32号墓 (第29図)

第29図 32号墓 (1/20)

23号墓の西側背後で検出された小型円形の土坑で、不整な円形をなす。検出面での長軸長44cm、短軸長38cmをはかり、深さは26cmである。壁はやや傾くが底面は平坦である。墓坑形態が円形であることから、使用された棺は小型の早桶であると推定される。墓坑の規模を比較した第30図から判断して、幼児墓であったと見られる。副葬品等の出土遺物は皆無であった。

なお第4図の調査前の墓石配置図からみてE号墓石と対応するものと推定される。E号墓石は第5図の相関表から方柱形墓石であったと推定され、台石は一段である。

33号墓 (第12図)

墓坑は検出できなかったが、19号墓の西端にあたる位置で検出された土師質土器小皿の存在から推定される墓坑である。第13図13がその土師器で正位で置かれた状態で副葬されたものと推定される。なお第4図の調査前の墓石配置図からみてN号墓石と対応するものと推定される。N号墓石は第5図の相関表から位牌形墓石であったと推定され、台石は一段である。

おそらく墓石が小型である点と土師質土器小皿の出土位置の浅さから見て、本来幼児墓であると見られる。

第7節 調査の成果と課題

1) 墓石から

墓地の存続年代と家族 現地においては位牌形墓石（1号墓石）と仏像形墓石（3号墓石）を確認したのみであったが、さきに移転時の記録から、復元したように本来この墓地には板碑形と方柱形墓石さらに舟形光背に仏像を浮き彫した墓石が存在していたことが推定される。したがって墓石形式の存続年代の一般的特徴からみて、板碑形→位牌形→方柱形と17世紀後半から19世紀にかけて推移するそれぞれの形式が存在していたことになる。茨川原近世墓地はおそらくこの地方の通常の近世墓地と同様に17世紀末から18世紀前葉に造墓を開始し、19世紀末までのおよそ200年間継続したと見られる。その間埋葬総数は20基前後であるから、累積した直系夫婦と早世した子供たちの埋葬と想定してみると、一家族の累代的な造墓活動によって形成された近世墓地とみてよいであろう。この点は茨川原近世墓地が角家一家族の祖先墓として祭られてきたという事実を裏書きするものであろう。

幼児用の墓石 ところで以上の三形式の墓石は普通成人用の埋葬にもちいられることが多いが、墓石から明確に幼児墓と考えられるのは18号墓に建てられていたと見られるG号墓石と、墓坑の位置は不明だが戒名が明らかな3号墓石の二基のみである。いずれも仏像形式の墓石である。移転前の記録から考えるかぎり、この形式の墓石がこれ以上ふえる可能性は少ない。するとこの茨川原近世墓地に含まれる「童子・童女」の戒名脚字をもつような幼児埋葬は、20基前後の埋葬の中の2基あまりということになる。この少なさは正しいのだろうか。つまり幼児埋葬が事実あまり行なわれなかったのか、または幼児埋葬は多かったが墓石を建てなかったかのいずれかである。この点については次項でも検討するが、大分市内の近世墓地では幼児墓のほとんどに仏像形の墓石を建てる女狐墓地と、幼児墓に墓石を使用することが少ない中尾墓地の両者が知られている。茨川原近世墓地は中尾近世墓地に近い様相を示していることになる。この両墓地はいずれも中世の植田荘の領域に含まれ、また明治時代には植田村と東植田村という隣接する村に立地している。このよう地理的な近縁関係が墓石の民俗の近さを表していると思われる。

台石 一方、台石一段と二段の年代的な変化に注目して第1表をみると、板碑形・板碑または位牌形と推定されるH・Iの二基はいずれも台石一段である。位牌形と推定されるF・N号の二基が台石一段である。位牌または方柱と推定されるもののうち、A・L号の2基が台石一段、B・C・D・O・S・T・V号の7基が台石二段である。方柱形のうちE号が台石一段、U号が台石二段、M号が台石三段である。一部例外は在るものの、板碑形→位牌形→方柱形と墓石が推移するにつれて台石が一段から二段へと多くなる傾向があることがわかる。恐らく板碑形と位牌形が中心の18世紀代が台石一段で、方柱形が中心となる19世紀代が台石二段になるものと見られる。さてこのような茨川原近世墓地の台石の変化の内容は、女狐近世墓地の変化と一致する。つまり台石一段と二段の違いは年代差としてあらわれる。これに対し中尾近世墓地は、18世紀初頭から19世紀末まで台石は一段のものがほとんどで、二段の例は200年前後の墓地の歴史の中で間欠的に時々あらわれ、いずれもほかの墓石より大きな本体に使われ、中尾近世墓地の墓のなかでも階層的に上位の家長夫婦に用いられる傾向がある。つまりそこでは台石一段と二段の違いは被葬者の階層差を表現している。したがって台石の用い方という点では、茨川原近世墓地と女狐近世墓地は同じ習慣を共有し、中尾近世墓地とは異なっている。

その他 仏像丸彫形式の墓石について触れておきたい。3号墓石として報告したものである。このような石造仏自体は供養塔などの墓石以外の用途で用いられることがしばしば認められるが、これまでに報告例はなく大分市内の墓石例のなかではきわめて稀なものである。本来は舟形光背に仏

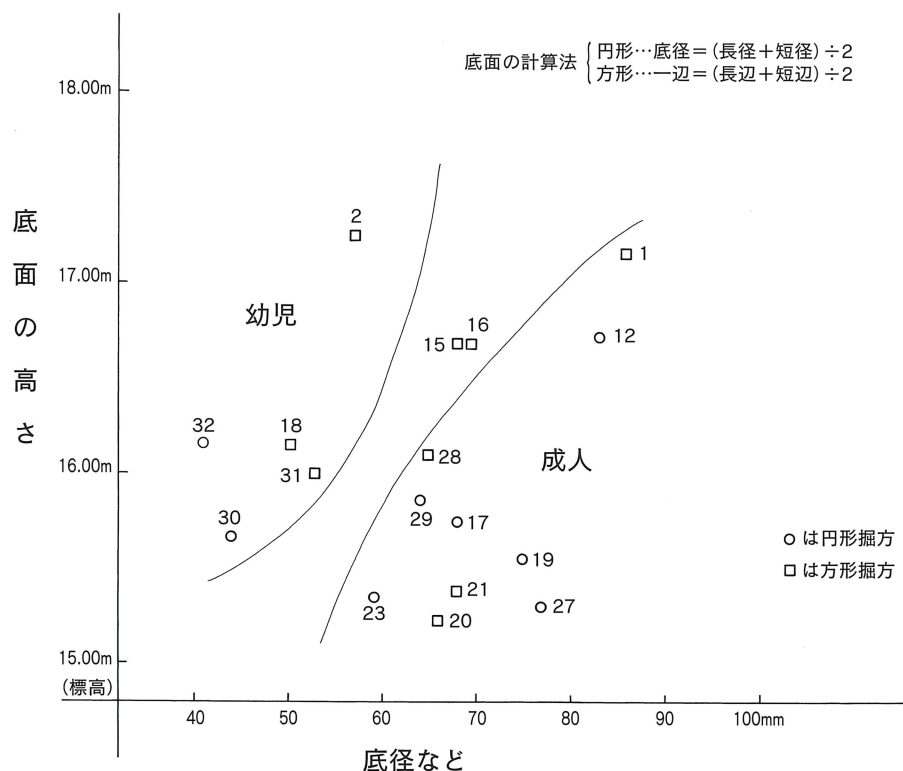
像を浮き彫した墓石を用いるところを、類似する小型の丸彫石造仏を墓石に転用したものと考えられる。

2) 墓坑と棺 (第30図、第3表)

墓坑と棺の形態 茨川原近世墓地において、17基の墓坑を調査した。このうち円形墓坑は9基、方形墓坑は8基である。円形墓坑9基のうち、釘が用いられていない点などの消極的理由から早桶が使用されたと推定される例は6基であった。残る2基の27号墓と30号墓は墓坑内部から方形棺に使用されたと考えられる交差錆着した鉄釘が出土した。この点からこの二基は円形墓坑に方形棺が用いられたと考えられる。このような例は女狐近世墓地では1例であったが、中尾近世墓地では19世紀前半から中ごろの墓で5例しられている。一方方形墓坑8基のなかで早桶が用いられたと考えられる例はなく、いずれも方形棺が用いられたものとみられる。このような方形棺を用いる例はやはり中尾墓地で知られている。以上のように茨川原近世墓地の墓坑と棺形態の内容は、同じ延岡藩領に含まれる中尾近世墓地ときわめてよく似ているといわねばならない。ところで中尾近世墓地では1790年代に早桶から方形棺に急速に変化することが指摘されている。茨川原近世墓地ではその点を検討する材料が少ないが、墓石形式と出土土師質小皿から18世紀代の墓と考えられる17・19・29号墓の三基はいずれも円形墓坑に早桶が使用されたと見られることは注目してよい。この墓地でも18世紀代の墓が円形墓坑に早桶が主流で、19世紀代になって方形墓坑に方形棺が主流になる現象を反映しているものと見られる。

第3表 茨川原近世墓地墓坑一覧表

遺構名	推定年齢	墓坑	棺形態と釘	墓坑の規模 (cm)	墓坑底面標高 (m)	備 考
1号墓	成人	方形	方形棺?	一辺 103×68	17.15	
2号墓	幼児	方形	方形棺?	一辺 60×53	17.25	
12号墓	成人	円形	早桶?	底径 91×75	16.17	土師質小皿 2
15号墓	?	方形	方形棺?	一辺 80×55	16.68	
16号墓	?	円形?	早桶?	底径 77×61	16.68	
17号墓	成人	円形	早桶	底径 68×63	15.75	蓋石
18号墓	幼児	方形	方形棺?	一辺 53×47	16.15	
19号墓	成人	円形	早桶?	底径 75×74	15.55	土師質小皿 1
20号墓	成人	方形	方形棺?	一辺 76×56	15.22	
21号墓	成人	方形	方形棺?	一辺 70×65	15.38	銭貨 5
23号墓	成人	円形	早桶? (鉄釘出土)	底径 61×56	15.35	
26号墓	幼児	円形	?	口径 75×71	16.30	墓ではない可能性あり
27号墓	成人	円形	方形棺? (鉄釘出土)	底径 80×73	15.30	
28号墓	成人	方形	方形棺?	一辺 70×60	16.10	ボタン 1
29号墓	成人	円形	早桶?	底径 67×61	15.85	土師質小皿 1
30号墓	幼児	円形	方形棺? (鉄釘出土)	底径 49×38	15.67	
31号墓	幼児	方形	方形棺? (鉄釘出土)	一辺 53	16.00	
32号墓	幼児	円形	?	底径 44×38	16.10	
33号墓	幼児	不明	?	不明	不明	土師質小皿 1



第30図 茨川原近世墓地墓坑法量相関表

墓坑規模と被葬者

いずれの墓坑も対応する墓石が明確ではなく、被葬者の詳細は不明というほかないが、他の大分市内の近世墓地の調査例との比較からある程度の推定が可能である。すなわち女狐近世墓地では「童子・童女」の戒名脚字をもつ墓と「信士・信女」脚字をもつ墓の墓坑の規模と深さに関連があることが判明し、中尾近世墓地でもその点は追認された。すなわち墓坑規模が小さく浅い掘

込みの墓坑は「童子・童女」の戒名脚字をもつ墓石と対応し、墓坑規模が大きく深い掘込みの墓坑は「信士・信女」脚字をもつ墓に対応するのである。

そこで、茨川原近世墓地の墓坑法量を次のように計算し第30表のようにまとめてみた。まず円形墓坑の場合は底径がやや長円形となる例が多いので、長径と短径を足して2で割る。方形墓坑は底面の長辺と短辺を足して2で割るという中尾近世墓地の報告で吉田寛氏が行なった方法を用いた。深さは上部の削平の度合いが様々なので底面の絶対高を利用した。この結果、第30表のように底径が60cmを境に大きく法量に二群に別れることが判明した。すなわち60cm以下の例は底面が浅い位置にあり、60cm以上の例は底面が深い位置にある。その結果前者を幼児墓、後者を成人墓と推定しその結果を第3表に記した。17基の墓坑のうち少なくとも5基の墓は幼児墓と見られる。この結果を先に指摘した幼児用墓石が二基しかない点と比較すると、茨川原近世墓地では幼児埋葬が少なかったのではなく、幼児埋葬には墓石を建てなかったか、あるいは幼児埋葬に使用する墓石は成人用のものと変わりがなかったものと考えられる。

鉄釘 なおここで棺形態の推定の材料のひとつとなる鉄釘について触れておきたい。茨川原近世墓地は移転時に改葬が行なわれているので、鉄釘の出土した墓坑は23・27・30・31号墓の4基でいずれも断面が方形の角釘である。中尾近世墓地では明治20年代を境に角釘である和釘から断面円形の丸釘（洋釘）に移行することが指摘されており、この点を考慮すると、茨川原近世墓地出土の角釘はいずれも和釘であり、一般的に江戸時代の埋葬に使用されたものと考えてよい。

また27・30号墓は二本の釘が交差した状態で錆付いており、あきらかに方形棺の結合部に用いられたものとみられる。以上の釘はいずれも断面方形部の一辺が3mm前後の小型品であり、中尾近世墓地で普通にみられる中型品とは異なっている。

3) 副葬品

茨川原近世墓地では墓坑と判定した19基のうち、埋葬に対する副葬品と考えられるものは12号墓

の土師質土器小皿二枚、19号墓の土師質土器小皿一枚、21号墓の六道銭五枚一組、29号墓の土師質土器小皿1枚の4例に過ぎない。他に15・16・18・27・28号墓で、染付の破片・硯の破片・ボタン等が出土したが、28号墓のボタンを除き、いずれも埋葬時あるいは移転時に混入した可能性が高く、副葬品とは認定しがたい。ただ注意すべきは15号墓と27号墓で出土した硯の破片である。埋葬時に墓地現地で硯を使う可能性は少ない。そのような硯が破片として出土したことは、何らかの葬送儀礼と関わりがある可能性があり、今後注意すべきものであろう。

土師質土器 (第4表) 墓坑あるいは包含層から出土した近世土師質土器は、第4表のとおり小皿8個体である。いずれも右回転のロクロ成形で、回転糸切り離しを行なっている。赤色顔料を内面から口縁外面に塗布し、そのうえに透明にちかい柿釉のほどこされた小型品が4個体、無釉素焼きのものが4個体である。前者は女狐近世墓地のC類に該当し19世紀代に流行したもので、後者は女狐近世墓地のB類にあたる。後者のうち19号墓-1は女狐分類のB-1類に、29号墓-1はB-2類にあたり、18世紀中葉と後半代に流行する型式である。

なお土師質土器小皿の出土状態としては、12号墓が19世紀代の埋葬と土師質土器の型式(C類)にもかかわらず、二枚セットの副葬で、一枚は破碎されて、完形のまま正位で検出されたことが注目される。19号墓でも1枚の小皿が破碎された状態で検出されているし、29号墓例も口縁部を欠いており、小皿の副葬にあたっては割らずに供えた場合と破碎して散布した場合があったことがしられる。

六道銭 墓坑内から確実な副葬品として銭貨が出土したのは、底面の頭骨脇で一組の六道銭が発見された21号墓1例のみである。21号墓は方形墓坑で、方形棺の使用が推測される埋葬である。対応するT号墓石も位牌形または方柱形と推定され、台石も二段である。以上の点から19世紀代の埋葬であると考えてよい。六道銭そのものは布でまかれており本来5枚一組であったことは確実である。

19基の埋葬のうちこの一例のみしか検出できなかつたが、本来茨川原近世墓地で銭貨副葬が21号墓に限られたものかどうかは不明というほかないが、墓地全体の出土遺物の中ではほかに包含層中から1枚の新寛永通宝文銭が出土したのみであり、本来銭貨副葬が乏しかったと見てよいと思う。同じことは中尾近世墓地でも指摘されている。

《参考文献》

田中裕介「女狐近世墓地」『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』(九州横断自動車道埋蔵文化財発掘調査報告5)1996 大分県教育委員会
吉田寛『中尾近世墓地』1999 大分県教育委員会

第4表 茨川原近世墓地出土土師質土器観察表

質量単位：cm

番号	器種	分類	口径	底径	器高	胎土	成形	調整	色調	備考
12号墓-1	小皿	C類	7.6	4.0	1.25	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	柿釉
12号墓-2	小皿	C類	7.7	3.2	1.3	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	柿釉
19号墓-1	小皿	B-I類	9.6	4.6	2.0	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	
29号墓-1	小皿	B-II類	8.5	5.4	1.5	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	
包含量-13	小皿	C類	7.2	2.5	1.2	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	柿釉 胎土に小石英粒多い
包含量-14	小皿	C類	6.6	4.2	1.0	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	柿釉 胎土に小石英粒多い
包含量-15	小皿	不能	(8.0)	-	-	精良粘土	-	回転ナデ	淡褐色	
包含量-16	小皿	B類	-	5.4	-	精良粘土	ロクロ(右) →回転糸切り	回転ナデ	淡褐色	

第8節 まとめ

調査の成果を以下に箇条書きにまとめる。

- ①茨川原近世墓地は、大分平野のもっとも奥まった七瀬川北岸に位置する18世紀初頭前後から19世紀末ごろまで継続した近世墓地である。
- ②19基の墓坑を調査し、かつては22基の墓石が建てられた一家族による墓地である。
- ③墓石は板碑形から位牌形さらに方柱形に推移したと推定される。幼児墓には稀に仏像形墓石が建てられたらしい。台石は18世紀代は一段であるが、19世紀代には二段に変化する。
- ④墓坑は円形から方形に、棺も早桶から方形棺に変化したことが判明した。方形棺の使用にともなって和釘が用いられている。また墓坑の規模によって幼児墓を推定することが可能である。
- ⑤副葬品はきわめて少なく、土師質土器小皿を副葬した墓坑は4基、六道銭を副葬した墓坑は1基のみであった。
- ⑥個々の埋葬習慣は、地理的に近い中尾近世墓地に類似するが多いが、台石の変化など一部要素では女狐近世墓地に近く、民俗現象の複雑さの一端を示している。

图版 1



12号墓 - No. 1

12号墓 - No. 2

包含層出土遺物



27号墓 - No. 1

19号墓 - No. 1

29号墓 - No. 1

包含層 - No. 13

包含層 - No. 14

21号墓出土錢貨